

川柳の雑記

麻生路郎☆主筆



noji.

十一月号

No. 438

Pensoj flugas trans la land - limon
THE SENRYU ZASSHI

大阪文化祭第15回川柳大会

恒例による大阪文化祭の川柳大会は左の通り第十五回を迎えるに至りました。初心者の方々も多数投句されま
すよう、おすすめてください。又どなたも出句の有無にか
わらずに来場の程お待ちいたします。

大阪府、大阪府教委
主催 大阪市、大阪府教委
関西短詩文学連盟
後援 毎日新聞社
日 時 昭和38年11月17日(日)
十二時開場、一時開会

会場 毎日新聞大阪本社講堂(桜橋南)

司会 西尾 松江 榎 栗

開会の辞

挨拶

講演

兼題

「女」 宮本又次氏
「鳩」 麻生路郎氏
「人生」 堀口塊人氏
「こども」 河野春三氏
若本多久志氏

席題二題当日発表
大阪歴史古代篇(スライド)

解説 大阪博物館

閉会の辞

川柳賞

兼題投句

席・兼題優秀句に大阪市長・教育委員長か
ら文化祭川柳賞を贈呈。

各題毎にはがき型句箋及び官製ハガキ一枚
に二句ずつ。裏面に住所・姓名・雅号を明

記。大阪市北区中之島、大阪府教委内

大阪文化祭川柳大会係宛 (十一月五日着

限り/切)

入選句集

希望者に頒布。一〇〇円、(郵券可)



えらばれ

みがきぬかれた 灘の酒

超特撰 日本盛



超特撰 (全戦タニクス) 一、八リットル詰・一、二〇〇円

酒 清

日本盛

ニホンサカリ

灘 西宮酒造 釀



不朽洞句帖

麻 生 路 郎

樹の高さまで
登りきっても知れたもの

保釈中だが
麻薬売るより策がなく

奥さんになやまされ
まだ重役室に居る

新聞少年が持って来た 寒さ

代議士は虚勢を張るにいつか馴れ

われ等陣笠とは 思わずに生き

時差出勤彼の女への思いそのまんま



川柳雑誌十一月号目次

★柳樽室……………(46)	★柳界展望……………(38)	★飛・燕・往・来……………(40)	★現代柳人録……………(19)	★不朽洞の人々……舟遊氏の巻……………(39)	★大万川柳「貸衣裳」発表……………(41)	★柳生路郎……表紙……………野尻弘	不朽洞句帖……………麻生路郎……………(3)	新聞少年の日に懐う……………不死鳥……………(27)	名句と難句……………麻生路郎……………(4)	高野山川柳考……………本多柳志……………(32)	死にぞこないと川柳……………東野大八……………(18)	題吟作家と雑吟作家……………直原七面山……………(28)	川傍柳初篇研究……………(八)	丸十府・岡田甫……………(12)	川端柳風・高須啗三味・前田喜代人……………(12)	岡崎重義・清博・美・藤井和雄……………(16)	山村祐という作家……………福岡阿弥三……………(30)	第六回短詩文学作品展……………(30)	句評リレー……………紫香・文庫……………(24)	窓口談義……………麻生路郎……………(28)	役者……………川岡霞眼子……………(20)	明治・大正柳誌順礼……………奥津啓一郎……………(40)	白子屋お熊……………富士野鞍馬……………(27)	★……………	川柳……………麻生路郎……………(6)	同舟近詠……………諸生路郎……………(4)	近作柳……………北生路郎……………(20)	金泥……………麻生路郎……………(33)	各地柳……………麻生路郎……………(42)	入門講座……………清水白柳……………(40)	一路集……………黒川紫香……………(34)	「京都」……………田中鳥雀……………(34)	「紅一点」……………河相すすむ……………(35)	▼社の黒板……………(46)
---------------	----------------	-------------------	-----------------	-------------------------	-----------------------	-------------------	------------------------	----------------------------	------------------------	--------------------------	-----------------------------	------------------------------	-----------------	------------------	---------------------------	-------------------------	-----------------------------	---------------------	--------------------------	------------------------	-----------------------	------------------------------	--------------------------	--------	---------------------	-----------------------	-----------------------	----------------------	-----------------------	------------------------	-----------------------	------------------------	--------------------------	----------------



川柳 名句と難句

麻生路郎

〔五七四〕

少女もう雌蕊の秘密知っている

(夢 虹)

赤ちゃんは何処から産まれるのか、どうしたら産まれるのか。私たちは物ごころのつくつかぬころから、そうした神秘の世界を覗きたがるものである。殊に女の子の方が、よりおませさんであるだけに、そうした方面の質問で母親を困らせるものだ。

少女時代に教えられるのは、雌蕊雄蕊の比喩による男女の交わりを、それとなしに談し、そして赤ちゃんが出来るのだと解説されるぐらいのものが、この句に描写された少女は既に雌蕊の秘密を知っているというのである。「雌蕊の秘密」とはいかにも婉曲に男女の交りを表現した言葉であるが、この句の場合の「知っている」は見たこととあるのを知っているというのか、もう既に異性の肌に触れたことがあるのを知っているというのか、その点はハッキリしない

い。これは日本語の持つ欠陥である。一種の末番句だともいえないことはないが、雌蕊の秘密というベールに覆われているので、少しも不純ないやらしさはない。それは技巧によって救われているのだ。

〔五七五〕

西成界わい

傘の骨ほど男があると酌婦酔い

(満 潮)

スラム街の飲み屋の女のいい草が振っている。「傘の骨ほど男がある」とは幾ら比喩にしても破天荒である。もともと比喩は破天荒なほど句を鮮明にするものだ。

「あんなたちも、傘の骨の一本になりたいんだらう。何時でも、してあげるよ」と戯弄されては野郎どももサッパリである。

〔五七六〕

肝臓の方は先生どうでっか

(生 薑)

話し言葉で構成された句で、何んの変哲

もない表現だが、「先生どうでっか」と大坂弁で医師の顔色をうかがう患者の態度には真剣なものがある。「肝臓の方は」という質問も当を得ていて患者の過去を想像させるだけの力を持っている。

肝臓の病気には肝臓委縮症といって肝臓が自家融解によって崩壊し容積の縮小する病気と、肝臓硬変症といって、肝臓の实质細胞の変性再生と結合組織の増加とによって肝臓が硬くなる病気とがあるそうだが、治癒は困難だが近頃では治療法の進歩で軽快になることもあるとのこと。「先生、どうでっか」と質す原因がそこにあるのであろう。薬剤師で川柳の巧まかった西田艸葉君はだいたい以前に肝硬変症で亡くなった。それで私はこんな病気のあることを知ったのである。近くは画家の菅橋彦さんがこの病気で亡くなった。この病気は中年以後の男子に多く発生し、アルコールの乱用が重大な原因とされている。がその他の原因もあるそうだ。

〔五七七〕

忍従一途を円満とひと言う

(八 郎)

あいつは田満な男だと他人はいうが、生きて行くためには忍従の外に手がないので、やむなく忍従の道を選んだのだというのであろう。世の辛酸を嘗め尽くした人の独白である。「ひとは言う」に、そうした反語が秘められていることに思い及ばなくては、この句の真意は解せられないであろう。

〔五七八〕

詠 近 舟 同



大阪市 橋本 緑 雨

鈴虫の声硝子戸をこえてくる
人生を考えると悪はしなかったが

須坂市 高峰 柳 児

子はみんな大学老舗淋れきり
アルバイト母のモンベが役にたち

抜擢の沙汰袖カバー素通りし
妻の座の堅さを見せる座りだこ

売り喰いは収用法へ腰を据え
ライバルに隙を見せまい喋りよう

苦笑してせめて敵意をのぞかせる

和歌山市 秋月 宏 方

いふなれば虫は女性の声楽家
大ジョッキ僕のスタミナつく菓

人間の年輪皺も深くなり

灯明へ一札をしてボス曳かれ

(どんたく)

「旦那一寸待ってください。逃げも隠れもしやしません。おやじに報告するだけです」

と、ボスは神棚へアカアカと燈明を献じ、一札をして、刑事のあとに続いた。僅僅十七音字で、ボスのボスらしさを巧みに描いているではないか。

〔五七九〕

看護婦の指先ぐらい握らせて

(喜 由)

大抵の入院患者は、病勢が少し衰えろと性的衝動にかられるが、病室で異性といえ、附添婦の婆さんぐらいのものだ。

そこで、ちよいちよい検温などで姿を見せる看護婦に、性に缺えた患者の眼が素通りしそうな筈がない。あのすがすがしい白衣に豊満な肉体を包んだ女性に魅惑的で、世間並み以上の美しい女に見えることは辟う余地がないのである。そこに恋ごころにも似た思慕の情が芽生えることは年の差や顔の美醜にはかわりのないものだ。いつ

のほどにか気脈が通じて憎からぬ人ぐらいになり、この句のように指先ぐらいは握らせて呉れるのである。斯うした熱は退院と共に下ってしまうのが普通だが、退院後も持続して結婚生活に迷ひこんでいる患者もすくなくはない。この句は看護婦と患者との心の進行状態を、ごく自然にとらえているところに妙味がある。

〔五八〇〕

暮れる京鐘は西から東から

(堰 子)

黄昏れの京都を詠んだ感傷的な句である。古都の夕べに、鐘が西から東から余韻を鳴り響くのは、いかにも古都らしい情景ではなからうか。旅人ならずとも、しばし佇む気にはなるだろう。

〔五八一〕

台風はそれましたよとパチンコ屋

(素身郎)

雨が降ろうが、風が吹こうが、パチンコ屋には終日、パチン、パチン、パチン、ジャラジャラでありさえすればいいのである。

台風何号が襲来するというラジオを聞くとき、さすがにパチンコ屋も慌て気味だ。台風は怖ろしくないが、お客様が一度にどつと引き揚げられるのが怖いのだ。静かな表裏であるが、パチンコ屋の動きが眼に見えるようだ。

〔五八二〕

母親の見合の如く娘は喋り

(後 江)

娘の見合いの場で緊張そのものの母親は明治の末か、大正のはじめの生れであろう。娘の方は、

「あんたサラー幾らもらってんの」と平気で訊く時代に生れているのだ。「母親の見合の如く」は奇抜なネライだ。

〔五八三〕

半分は片仮名という世を嘆き

(甲 吉)

新聞を開けばどのページにも片仮名が溢

れている。百貨店へ一歩足を踏み入れると、店内といわず、あらゆる商品といわず、片仮名で表現されている。街を歩いても右も左も片仮名のハンランで看板はもとより、距離を計算するのも重さを示すのも皆片仮名で、まるで植民地の行相を露出している。「半分は」どころの騒ぎではない。日本よ何処へいたと心あるものは嘆かない訳にはいかないというのである。

〔五八四〕

陀羅助が效く胃を子供不思議がり

(紫 光)

時代の相違をズバリと指摘した句だ。昔あるところにお爺さんとお婆さんがあったというところとは何処やという時代のこのもである。薬といえばAだのBだのという時代のこのもである。陀羅助が効くという胃を不思議がるのももっともだと思う。

陀羅助(薬名)は陀羅尼助(だらにすけ)の略称である。本家は吉野で、吉野大峰で焚いた香の煤煙に百草を交え、陀羅経をとる時に、睡魔を払うために調製したものであるが、後にはせんぶりの根で製したようである。色が黒うて、非常に苦い薬で腹痛に効き、一般には氣つけ薬として用いられたそう。



いつからか恋にキッスという技法
車米ぬ土地に住みたいとも思い
神様も世渡りおみくじなども売り

近江石山寺

銭出して掲かして貰う鐘の音

大洲市 米 沢 曉 明

後ろから見られたさまでない花輪
幼稚園そろそろ嫌味習って来

おとほけなさんな女の瞳がいった

演芸会殿様になる男前

今宵みな盗られても五百円

殿様の役は社長にして無難

病状は看護婦までもとほけてい

放浪記婆婆を裏から表から

今治市 長 野 文 庫

合槌をうってホステス知ったふり

そんなことまでと取材へ腹が立ち

今治市 月 原 宵 明

味気なくスイッチいれる仏の灯

願わざる儀と葬儀社のビーアール

社長室竹馬の友が来た長さ

きものショウウいてみるだけの許し乞い

ホルモンと書いたのれんへはっぴ消え

群衆へ警棒さげて頼り無し

名古屋 長 谷 川 鮮 山

不吉感するする蜘蛛が降りてくる

慌てても駄目くるとこえ来た落目

電気製品さあ見てくれといった顔

人妻となり近寄りがたい気品



川柳塔

麻生路郎選

ハワイ 羽佐間柳葉

切り上げて去ねの欠伸に気がつかぬ
年功序列さえ見送られ庶務の端

堺市 吉田圭井堂

五連安打無得点とは俺に似て

一票の差がちやほやとされる身に

編み笠のつもりか軸を置いて去に

尊徳を問えば校庭散つちまい

防府市 長野井蛙

選挙区へ自信のないのから戻り

履歴書が腰が据らぬところを見せ

弁護士は無罪にせねば気がすまず

岡山県 直原七面山

たった一度の情事を抱いて婦長老ゆ

田を守る尊さを娘ら理解せず

トラ刈りのようにジャリ船ジャリを採り

出世出世社長の隠し娘を貰い

大阪市 西森花村

墓参り孫や曾孫は鬼ごっこ

言うなれば栗のイガなり自衛隊

糖尿にかかりそもない平社員

秋雨や何時迄墓に傘さして

大阪市 中島生々庵

彼岸詣りささえの壺焼き悲しいね

あまく見た粘土ぐらいがままならず

豊中市 若本多久志

お手伝さんと称んでもきては更になし

辞書ひいて雑文二枚脱稿す

二学期へ母やきもきと共学す

大阪市 松江梅里

二三杯酌いでご指名消えたまま

歴史もう神代の嘘に触れていず

後添えが来てから娘等は寄りつかず

大阪市 正本水客

叱られた子がお休みを言うて寝る

遠者そなた乞食の顔を見て通る

自分だけに正直に生きてきた

引きとめる言葉さがしているうちに

合格が決って歯医者へ行っている

井上八千代うごけば秋の風になり

高槻市 丸尾潮花

扇風機夏をつとめた汚れよう

一本のビールが呑めぬ夫婦にて

燃えるだけ燃えてた頃がおそろしく

便箋は昔のことはもう書かず

置き舞台竹の枯葉が飛んで来る

大阪府 西いわを

仏像は眺める丈のものでなく

病み上り雀集めることに凝り

大阪市 北川春巢

家建てたとたん血圧上りだし

さわりだけのお経を頼む七回忌

牛歩した疲れか代議士の計報

泥棒の人権ばかり大事がり

日君へ

君もとうとう雨憎む人になり



スタンプでいずれ勲章も貰えそう

鳥取市 河村 日満

ざわめきになって囁きはねかえり

パン喰いの頬を秋風撫せて過ぎ

男とはなぞと女中の眼が笑ひ

トンネルの口日食のように消え

大阪市 足立 春雄

夏祭りまだ生きていたアセチレン

見たような夢で目覚める真夏の夜

一応は聞きおくだけでよい社長

大阪市 安岡 珊枝郎

小さい親切落ちて居ぬかと油断なし

大阪市 牟田 一哲

死にそこね戒名しばしもちになり

世の乱れ一と足出れば命がけ

大阪市 河村 瑞川

羽田路に早や郷愁の走りあり

倉敷市 木村 千客

やきもきしても己が体がついて来ず

米転の夢でも見たら若かえろ

倉敷市 田垣 方大

飛躍するなよ君俺が好きなんて

感情のもつれ暖炉の火も消えて

開封もせずに破った嫌いよう

取調べ吃りの不利を知らされた

甘えとるうちとは親は気をゆるし

加賀市 野村 味平

残り花あげて無縁もおがんどき

P.T.A又小卒がみくびられ

何故に彼女は盗むこと覚え

貸衣裳と知らぬ花嫁まぶしがり

学力を言われて事務の隅で生き

大阪市 木村 水洞

わが家さえ揉めるに世界なおさらに

修養の未熟を悟る齢になり

匿名で寄附をすませた酒の味

妻に風邪うつしてもろて出勤し

米子市 小西 雄々

ウインクへうっかり落したつけ睫毛

新婚へ社務所の鳩もおりて来る

友情は友情として恋敵

大阪市 山川 阿茶

京の秋野菊のような娘に出会い

スードにもスターがあつて風を切り

人命を軽視したのが生き残り

集金のマダムへ会計そつ気なし

大阪市 金井 文秋

会社ではベコベコ帰っては敷かれ

ナイターの間はドラマ追いやられ

若い女を狙えとは雑誌の合言葉

加賀市 那谷 光郎

ハイキング吊橋ゆれてみな黙り

✓ かけまくもかしこしバーが建つ敷地

よき妻でありたい胡瓜もみにさえ

大阪市 中島 小石

ハンドバック三度持ちかえ待つ長さ

サングラスかければ息子も不良めき

大阪市 福井 野迷路

南無阿弥陀医者も序におがまれる

南無阿弥陀殺した医者も拝まれる

効かんでもよい十円のお賽銭

出雲市 尼緑 之助

虫しぐれ寝酒へ深くおしせまり

大阪市 水谷 竹莊

共白髪先に死ぬ日を望みあい

サングラス指名手配のように見え

京都府 大鶴 喜由

見島市 本田 恵二朗

倉敷市 野田 素身郎

なにが農だ女は街へ流れ行く
ムードが去ると女他人に戻り
消え残る色気をマダムあわれがり

ライオンズのバッジをつけて低い腰
緑台のババのあばらを数えあい
京都市 松川 杜的

政治的駆引き趣旨がゆがめられ
蜜豆を付き合おうかと課長さん
安かったのよと文句を言わさぬ気
京都というだけで美人と思ひこみ

奈良県 飯降 白香

額的位置変えただけの公休日
撞木の減りも国宝と云うお寺
鳥取市 森本 法泉子

スタンドバーの隅で人生ねり直し
目と鼻のところから恋の赤電話
戎橋信じ合ってる瞳で別れ
岡山県 池田 古心

廃液の小溝に黄菖蒲咲き乱れ
電線に帰るつばめの勢揃い
夕映の河へ泥舟のくさいこと

入院をしてきて東京を鼻にかけ
N氏退院

世は乱る最高裁のせわしすぎ
選良よ君は一体何をした
岡山県 西辻 竹青

雲一片鳶の孤独が救われる
長男の宿命山田で牛を追ひ

信心の代理もさせるお金もち
銀行の自動扉に知る文化
ぼやぼやするなお猿も煙草喫うてるぞ

針のある餌と知ってか振り向かず
主に遊び従に仕事で壁は落ち
小平市 石居 高志

岡山県 服部 十九平

大臣の菓参に寺の皮算用
親切の裏にひそんだ恋心
蚊取線香二人の夢へまだけむり

経済的手腕は税務署飲ますだけ
渾んだこと仕方ないがとまだ怒り
経理的な腕は税務署飲ますだけ
大阪府 早川 清生

呼鈴ヘシヨートパンツが立って開け
ダンブカー金一升の地上げに来
頭陀袋カメラも入れた身延山

解散ムード代議士つくり笑顔見せ
病む母の細さは秋の蚊にも似て
秋風にバーも手ぐすねひいて待ち

巫女にひれふす北浜の旋風児
応接間ボス力道と撮った額
泰然と誤診しいつか癒しとり
大阪市 西出 一栄

岡山県 田村 藤波

岡山県 永松 東岸

女世帯ばた餅つくりかすし巻こか
言論の自由がムードぶちこわし

岡山県 田村 藤波

岡山県 永松 東岸

女世帯ばた餅つくりかすし巻こか
言論の自由がムードぶちこわし

岡山県 田村 藤波

岡山県 永松 東岸

女世帯ばた餅つくりかすし巻こか
言論の自由がムードぶちこわし

岡山県 田村 藤波

岡山県 永松 東岸

女世帯ばた餅つくりかすし巻こか
言論の自由がムードぶちこわし

岡山県 田村 藤波

岡山県 永松 東岸

女世帯ばた餅つくりかすし巻こか
言論の自由がムードぶちこわし

岡山県 田村 藤波

岡山県 永松 東岸

女世帯ばた餅つくりかすし巻こか
言論の自由がムードぶちこわし

岡山県 田村 藤波

岡山県 永松 東岸

女世帯ばた餅つくりかすし巻こか
言論の自由がムードぶちこわし

岡山県 田村 藤波

岡山県 永松 東岸

女世帯ばた餅つくりかすし巻こか
言論の自由がムードぶちこわし

岡山県 田村 藤波

岡山県 永松 東岸

女世帯ばた餅つくりかすし巻こか
言論の自由がムードぶちこわし

岡山県 田村 藤波

岡山県 永松 東岸

女世帯ばた餅つくりかすし巻こか
言論の自由がムードぶちこわし

岡山県 田村 藤波

岡山県 永松 東岸

女世帯ばた餅つくりかすし巻こか
言論の自由がムードぶちこわし

岡山県 田村 藤波

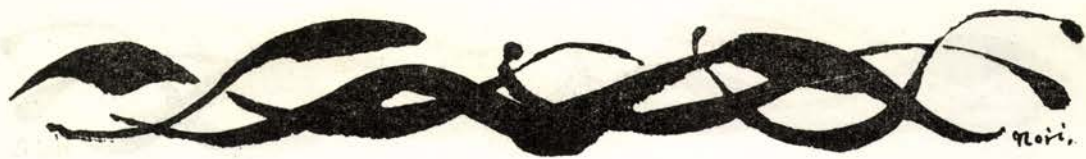
岡山県 永松 東岸

女世帯ばた餅つくりかすし巻こか
言論の自由がムードぶちこわし

岡山県 田村 藤波

岡山県 永松 東岸

女世帯ばた餅つくりかすし巻こか
言論の自由がムードぶちこわし



堺市 辻 圭水

まきぞえの意志の弱さを知らされる
マイナスと分れど正義おさまらず
まきぞえの警察さえも慌てだし

大阪市 児島与呂志

嫁はんに追い立てられたを車掌受け
人件費がどうのこうのと云うて逃げ
大人びた娘の言葉に負けてやり

総社市 野々口美舟

太陽を飛行機で追う旅に立ち
パトカーの笑顔は知った人だった
いいばばになるのに金がいるのなら

岡山県 池上知恵美

未亡人でつかと盃まわって来
道一っぱいに歩いて柿の実つぶされる
立秋へ線香匂う無縁墓

男なんて大嫌いさとうそぶかれ

大阪市 橘高薫風子

悪銭を分ち淋しさを分ち
遠き人を北斗の杓で掬わんか
飼猫へやさしき言葉旅帰り
パチンコ屋大人は大意抱かざる

下関市 中村九呂平

狭みなはずし目出度い人と坐し
うす暗い灯に別々な気に向い

大阪市 西川 晃

万引と眼が合うたので笑うとく
風のそよぎにも善人気をつかい
虹を吐きそうな瞳をして恋してる
芸術が解らぬひとの句説法

神戸市 仲どんたく

月も秋虫も又秋酒も秋
凶のないおみくじひいて山を下り
ホステス今日金に生きんと決心し
重役に教えるねぎの値豆腐の値

平田市 久家代仕男

仙人のような大工で冴えた腕
避暑客を帰して浜の月見草

大阪市 本多柳志

腕風の予報ほうせん花もはじけ
酒ぐせをほめられてサービス料とられ
遠縁になる程喪服美しく
コネと金もう解散もこわくなし

岡山市 江国幽谷

追いついて見れば標準以下の顔

三人になればしゃべれる無口な娘
退める気になれば重たい靴になり
ペンキ屋のズボン汚れていて似合い

西宮市 野呂鶴汀

庭へ立つ父の怒りを背に見たり
怒りぶちまけて煙草へ火がつかず
悪銭と知らずに母が感謝する

新潟県 高野むじな

同じこと何度聞かれる目撃者
祝電のこれも紋切形で来る
酒が云うのか此の人が右派だった

大阪市 石倉旅風

今年からいいよいよ秋が好きに
右を歩けば突き当り突当り

汽車ポッポローカル線が恋しなり

甘辛の味いれかわり老夫婦

惚れたのか低い男とハネムーン

科学にはおいてけぼりの人間味

芸冥利口いっぱいの顔の声

太陽を拝む社長で盛り返し

大阪市 魚住満潮

続西成界わい



留置場はよかった朝昼晩と飯が来る
万引が若い巡査に泣きくすれ

散髪をしてくると無心逃げられる
ほら吹きが来て半日を無駄にする

愛媛県 村上 旭童

借家住いに何の自家用

信心は寄附する事を見つけたり

神戸市 傍島 静馬

借りのある人に病気を見舞われる

人づくり教育勸語見直され

定退に隠居せいと云わぬなり

これっばかり取りに来まいと払わぬ気

岡崎市 木山 遠二

心臓だけが死なず肉親を待っている

若い氣でいるから孫がなつかない

伝説の野井戸唄んで曼珠沙華

お彼岸の墓前に老の長話

大阪市 平沢 保美

歩は歩なり香香なりの異動にて

人事異動成歩にされた風当り

冷笑の中に課長のような動き

素晴らしい喜劇社長の誠が飛び

花持たす弔辞仏は莞爾たり

晩酌へ今日も自嘲があるばかり
投げキッスだけで今宵もごまかさ

布施市 森下 愛論

坐るにも起つにもポーズする娘

祇園茶屋何か書きたい金屏風

ツイストも馴れてしまった祇園茶屋

坐ってから去ぬまで妓手を握り

姐さんの手帖電話番号ばかりなり

大阪市 河井 庸佑

裏話知らぬは自分だけと知り

転校の大阪弁を取り囲み

大阪府 谷沢 好祐

子のキャンプ決って金のネットワークス

ベテランはM化しているバスガール

愛媛県 横 紫光

演習のときの火災はすぐに消え

日本は狭し稲田を人が這う

定年を指折って見る味気なさ

青森市 工藤 甲吉

エロ雑誌いい年をして嬉しがり

女房は恐し会計検査院

チンジャラジャラチンジャラジャラと国乱る

その鞆が安月給を物語る

分相応ドタ靴さほど気にならず

豊中市 林 夢虹

リカ子恋大仏さまの御目やさし

リカ子旅時雨を持って来たような

麦畑乙女の髪の匂う恋

大阪市 今西 生薑

入院もこっそり出来る夏布団

ボス相手ならと証人引受ける

京都市 室井 八九寸

追悼のご姿勢正しお二タ方

右書きの屋号字体にみる歴史

妻子叱りとばして平和運動へ

栄養満点という食事の味気なさ

岡山市 横山 一声

(二十年振りに友を尋ねて(二句))

妻君も別人だった二十年振り

あの時の赤ちゃん赤ん坊抱いて居り

小松市 関戸 宗太郎

みみずでは耐も相手にしなくなり

石川県 高山 涼髪

社長またどこかの株で失敗し

膝小僧出した女の自家用車

来年を約して稲刈部隊去に



女子寮がねむりいよいよ冴える月

美祿市 安平次弘道

立読みの株の知識が仇となり

付け換えるガーゼにナースの気立を見

立板に水のガイドで親しめず

自分の時間を失ったのがスター

売名か罪の深さを意識せず

諫早市 川岡靈眼子

一人児のかたこと家の灯がともし

合掌をして淑かさほのめかし

貝塚市 杉本一鶴

手術後は影まで肩をいからせる

君に報いるすべもなくやせほそる

口ぐちに女患料理へ助言する

富田林市 浅川八郎

靴を見てやつと女と判別す

新築に早くも襦袢が乾してあり

岸和田市 内藤きさ子

くつわむしここへおすわり夜なべの灯

一匹の短気へ蜂の巣が焼かれ

世は移る鏡花の恋を笑うひと

祭の灯に遠いところは虫の声

葉げいとう三日見ぬ間の恋の色

ナイターにあらす突貫工事の灯

芦屋市 唐崎専翁

簡易なる通世阿呆の成れの果て

へんびでもお客と四季は訪うてくれ

倉吉市 奥谷弘朗

思い出の校舎工場に売られてい

歩は歩でも成歩と自称して勤め

流行のサンダル妻もまだ若し

兵庫県 遠山可住

田舎出の餅の小さいのが不満

生き残り飲めばオクニヲナン百里

男にして呉れと町議に立ちたがり

萩の花こぼれる径も自家用車

精農といわれて嫁のきたがらず

扇風機味付のりを吹き飛ばし

兵庫県 河原みのる

一票の安請合いが幾人目

孫と子と声で区別がつかずなり

吾老いたりなむすめが白髪抜かせとり

社務所の鶏はアルミ貨喰べ残し

姫路市 鷗岐不酔

手を振って年期中座る床柱

大阪市 田中敏行

里帰り汽車の中から訛りが出

暴力に耳そばだてて目をつむり

鳥取県 清水一保

地方選一息入れよと告示され

流行語恥をしのんで子にたずね

出雲市 中川晃男

老いらくの恋へせんそく邪魔をする

記念日を一日所長に見て貰い

結び目が決め手せばまる捜査網

松江市 柳楽鶴丸

次々と壁を破って来たけれど

マンマンと若さが匂う選手部屋

若き故僕の帰りをとがめられ

京都市 都倉求女

野火の中汽車は絵画的カーブ

明るい葉暗い葉重なり谷晩夏

だんだんに混んで車掌が生きてくる

聖書読んだる満員へ足組んで

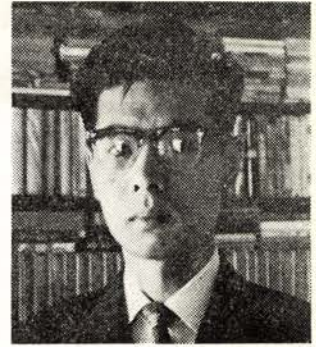
一分前まで窓口開くのか疑がった

兵庫県 大江秋月

真剣な顔がならんだ母の会

アルミ貨の踏まれてラッシュ無事終り

カロリーにふれて店主の如才なし



清 博 美 氏

川傍柳初篇研究 (八)

丸 十 府 高 須 啞 三 味
岡 田 甫 前 田 喜 代 人
川 端 柳 風 岡 崎 重 義
藤 井 和 雄 清 博 美

65 石塔へとかま^{なく}って啼衣蟬

一 甫

高須「衣蟬」とは、川柳独特の名で、普通の辞書には出ていないが「石塔につかまって泣く」というところから、「亡き人を恋慕う」意がとれるから、何かそれにかかっている句と思う。

前田「衣蟬」の句をさがしていると、「菩提樹へ集まって鳴く衣蟬」(タル二六)日が見つかった。この句と同様、別に深い意味がなく、「石塔」と「衣」と縁のむすびの句であると思う。「衣蟬」は衣に縁のある法師蟬(つくつく法師)であろう。岡崎「礎解プラス縁語結び説で、この句よく判る。

清 贊

藤井「衣蟬」を「法師蟬」なりとすれば、句は判るが……。

川端「前田説に賛。つくつく法師は旧盆のころ啼いたのを記憶している。

丸「石塔と衣との縁語仕立ての句であろう。「衣蟬」については、前田説拝聴。

岡田「衣蟬」は、かねていろいろ調べてみたが、文献とほしくハッキリしないが「衣蟬大序のようにうなり出し」(タル一六三)の句からして、小生は東京でいうミンミン蟬(前田さんのいられる下関あたり)に、これがあるかどうか、九州長崎にはミンミンはいず、それに似てもう少し大型の「大蟬」というのがいて、油蟬よりうるさく鳴く)だろうと思っている。大序とは、浄ルリの出だしの低いが重々しい調子というのだが、ミンミンの鳴き出しを知っている人なら小生の説を理解して頂けると思う。ちなみに、ミンミン蟬の羽は、ツクツク法師に似て白く透き通っているが、ツクツク法師の鳴き出しでは「大序のように」が似つかわしくない。

高須「なぜ普通の名称で言わないのか。川柳に限り、そういうことが許されたとは

思わないから、「法師蟬」を「衣蟬」ということは、当時の言いならわしであったのかも知れない。しかし、後世の人を迷わすような、こういう用法は賛成出来ない。とにかく「蟬が石塔にとまって鳴いている」のを詠んだ句とすれば、触目句としてもつまらぬ句と思うが。

丸「衣蟬」については、岡田氏の言われる通り、文献乏しく諸家の研究も見当たらない。頼原退蔵先生の「川柳雑俳用語考」に「追記」として「袈裟掛の松に床しき衣蟬」(タル一六〇)の句を引用して「やっぱり蟬の一種に衣蟬というのがある」と見える」と言っている。恐らく岡田説の如き蟬と思われる。

岡田「高須兄の再説に賛成。衣蟬と石塔を取合させた、つまらぬ句。初代川柳時代にも、こうした唾棄すべき狂句調が、すでに発生して、やがてそれが明治までに及んだのである。

66 説言で息子は広い座敷なり 秋 紅

高須「広い座敷」がちよっと判りかねて、弱った。詫びを言って、息子が許されて、わが家(広い座敷)へ帰って来た、という句か。

前田「座敷」は「座敷牢」ではなからうか。説言の結果は広い座敷牢に入れられたと解したい。放蕩息子と座敷牢との組合わせは、約束事のひとつである。

岡崎「座敷牢に入れられていた息子が、「詫び言」がなくなって、やっと晴天白日「広い座敷」に出られた。という句ではないだろうか。

清「岡崎説に賛。「広い座敷」は座敷牢に入れられたのではなく、出られたのだと解する。

藤井「説言で」の「で」で、やはり岡崎説をとる。「説言がなくなって」であろう。川端「岡崎説で「説言」は、母親または母子共々ではなからうか。

丸「岡崎説賛。「説言」を誰と限定する必要はあるまい。母親の場合もあるし、親戚の場合もあるし、番頭大工の場合といろいろである。狭い座敷牢から、広い座敷へ解放されたというのがこの句のねらいである。

岡田「晴天白日説に賛。

高須「礎解が的はずれでなかったことに、胸をなでおろしている。丸先生解で言うことなしである。

67 女の世話に成ってると者い^{ばくしや}い

高須川古い者に見てもらったら「その人は女の世話になってますな」と言われた——という句だから、見てもらっている人は息子に家出された母親か、亭主に逃げられた女房と見たいが……。

前田川賛成。但し息子にとりた。

岡崎川女——というのは髪結いか。

清川行方不明の息子の居所を、卜者にたずねたところ、卜者が言うのに「息子さんは、吉原で女郎の世話になっている」（つまり吉原にいる）と答えた、解するが如何。

藤井川息子説、女は息子の好いた女で、世話になっているとは、食わしてもらっているの意で、吉原よりも髪結いなり、遊芸師なり、自立している勝負な女と思いたい。ありそうな世情風景。

川端川息子説。卜者は大道易者か。古川柳では、ボ易者が多いから、客の風采も自ら吉原遊びの出来家庭とは思えない。

丸川行方わからぬ息子の安否を卜ってもらった答えて、女の世話になって健在だというのが主眼だから、相手の女の職業まで考える必要はあるまい。

岡田川小生は「吉原居続け」説。息子が二日も帰って来ないので、心配性の母親が卜者に見てもらったら、曰く「女の世話になっている……」亭主では面白くない。息子とすると、単なる女では、これも面白くない。やはり吉原だが、それまでを句面に出さず「女の世話になっている」で止めたところ、ちよつと面白い句と思う。

高須川岡田先生説に一応は首肯したのだ

が、吉原に居続けするくらい息子の母親が、二日や三日の不在くらいで、易者の所まで行くとはちよつと考えられない。いくら古川柳でも、そこまで吉原一点張りに考える必要もあるまい。川柳としては、亭主の長く帰って来ない女房と見た方が、複雑で面白いのではないか？

68 桐の木の上に鷹く十三羽

三朝

高須川ただ「日本の琴」のことを言っただけの句と思う。「桐の木」は琴の材、「鷹々」は琴柱、「十三羽」は十三絃で、十三の絃に琴柱をおくから「雁々十三羽」で、「日本の琴」を洒落て言い現わしたものの。

前田川岡崎・清川礎解につきる。

藤井川賛成。鷹々は別に琴の音には関係ないであろうか。

川端川「雁々」は雁垂れの形をしているので、琴柱の異称に使われているだけのことで、他に意味はないと思う。

丸川礎解よし。

岡田川未だ確証はないが「雁々十三羽」は、当時の童謡の文句とりと思う。

高須川なるほど、ワラベウタの文句とりでもなかったら、何等意味のない句ではないか。

69 老文の風八竿だけ上ッてる

龜遊

高須川「安風」が、うまく上がらない……子供は、竿の先へ系をつけて上げるから、その竿の方が、風より上がっている……というだけの句と思う。

岡崎川竿だけ差し上げながら、いくら走っても、風はいつこうに揚がらない——幼い子供の情景は、よく見られたものだった。藤井川今でもよく見られる風景と思う。丸川竿の先にゆわいつけて上げるのだから、竿の高さだけしか上がらない。というのであろう。

岡田川丸説面白し。なるほど然らん。

高須川私は「竿だけを」「竿のみ」と解していたが、丸先生の如く「竿の高さまで」と解することも出来ることを知って、そうかなと思った。

岡崎川私は「竿の高さまで」とは思わない。まだ満足に風を上げることの出来ない幼児は、竿の先に、二メートルほどのヒモをつけて、走り上げにするのが普通だから「竿だけ」が上がつて、風は上がらず、むしろ引きずっているような情景だと思ふ。だから礎解がよいと思う。

藤井川数学の問題のようだが、子供が小さくて、よたよた歩きの幼児の場合は高須説、腕白小僧の場合は丸説で、よいのではないか。

(5オ)

70 らつ木杯切つて火繩をまき付ける

眼狐

前田川「らつ木」は、五月頃に五弁の白花の咲く観賞用の木。その木材は木釘をつくるに用いられる。「火繩」は、芝居で切落し用の煙草の火。また鳥銃にも使用した。ひのきの皮、竹の繊維で作り、これに硝石をしみ込ませたものである。なぜ火繩をまきつけるのかわからないし、「など」

に何か含みがあるのかもしれないが、何かのまじないかもしれない。

岡崎川わからない。

清川通人か粹人。芝居を見物するために、家にあるうづぎの枝でも切って行ったか。

藤井川不明。

川端川「火繩」は、野歩きなどの煙草の火としても使用されたから、「など」はうづぎに限らず、何でもよいという意に取るが、私には「まきつける」がわからない。

高須川「うづ木」は空木とも刺木とも書き、生垣や地境などに使われた。いとうことは、ごく身近にある植物ということ、それを「切つて、火繩を巻き付け」たということは、身近の植物の枝など切つて、火繩携行の道具にした、ということであって、敢えて芝居見物と限らず、野遊びの時など、火打ち道具を持って歩くより軽便でよかったのではないか。

丸川川端・高須説に賛。春の野遊び（野掛け）に、タバコ火の火繩を携行したので、手にさげて行くのはいささか邪魔になるので、途中、道ばたのうづきなどを切り取つて、それに火繩を巻きつけて、携行の便にしたのである。「川柳年中行事」の春季雑詠にも、野掛けに火繩携行の句が三、四見える。

岡田川野掛け（今の郊外ハイキング）説賛。マッチなんて便利なものなかった時代だったから、ハイキングにも煙草の火には困つたらしく、自宅から火ナワなど用意して出かけたのである。巻煙草などなく、一服々々煙管で吸うのだから、一々火打ち

でつけたら大変だ。

71 むごい事嶋田金谷の間で死

泉 河

前田「嶋田金谷」は、大井川をはさんで、東岸は駿河の嶋田、西岸は遠江の金谷。いずれも宿駅である。「間」は勿論大井川をさしたのであるが、川が増水したか何かで渡川の途中死亡した。「むごい事」は「間で死に」を生かしているが、句としては平凡である。

岡崎「むごい事」という「死」は、仙台伊達綱宗に身請けされ、芝の下屋敷に船で向かう途中、三叉のあたりで吊し斬りにされた三浦屋の高尾に万斛の涙をそそいだもの。もちろん高尾をめぐる情夫島田重三郎と、黄金花咲く仙台藩伊達侯の「間」を、大井川をはさむ嶋田と金谷の宿になぞって結びつけた句。

藤井「岡崎説に賛。それで「むごい事」が、よく利く。ただ「金谷」は「黄金花咲く」云々でなく、数千両の高尾の「身受け金」のことではないか。

川端「賛。「金谷」も藤井説に賛。

高須「藤井説に賛。ただし、岡崎氏よく解かれたり、敬服。今後に期待するところ大。

丸「岡崎・川端説に賛。高尾身請けの金は、高尾の体重と同じ重さの黄金ということになり、高尾を秤にかけると二十貫であった。黄金四千二百五十五両になる。

嶋田より金谷の方へうけ出され

(タル十二10オ)

岡田「諸説につく。岡崎氏の博学に感

服。

72 一生の遠道をして縁を切り

眼 狐

前田「鎌倉の縁切り東慶寺か、子なきは去るを詠んだものか、わからない。「一生の遠道」が問題である。「三年はむだあなにして縁を切り」の句があるが――。

岡崎「縁切り寺。旅に出たこともない内儀には、江戸から十三里、鎌倉松ヶ岡まで駆け込むにはまさに「一生の遠道」だったのだろう。『子なきは去る』のでなく、亭主が駄目で、そのくせ離縁はしてくれない場合である。

清「岡崎説をとる。くだらない亭主に業腹を煮やして「百三十五里も花嫁は行く思ひ」であろう。

川端「賛。松ヶ岡の生活三年は、女にとって年齢的に大事な時期であり、十三里の道程もまた遠い。両方にかけたものと思う。

高須「川端説に賛。「一生の遠道」とは、うまい表現。それで、これまでのすべてを言いつくしている。佳句。

丸「縁切り寺説に賛。この句、年齢的にまて考える必要はあるまい。

岡田「同。

73 寺へ来て鈴をならして母ハ泣

龜 遊

前田「娘が死んだ時、片見の振袖で作って寺へ納めた天蓋の鈴を「鈴」といった。

「振袖へ鈴をつけるとあわれなり」がある。死んだ娘を思い出して泣いているのである。「来て」「鳴らして」と「て」が重なっているのが、句を説明的にしている。

高須「礎解丁寧。礎解どおり、「寺へ来て、鈴を鳴らして」で説明的すぎるが、そう言わないと「母は泣き」が利かない。現代句なら「母は泣け」と表現するだろう。

丸「賛。「むごいこと羅綾の袖へ鈴をつけ」(タル十二21オ)

岡田「賛。

74 うし町で評判をした女也

泉 河

前田「牛町」は芝高輪牛町。僧侶が品川通いをするのに、医者にばけてここを通って行った。邪淫戒を破った僧、またその相手となった女も、牛になるといふ仮えがあった。句は、邪淫戒の女の場合をいったのであろうか。これを「評判をした」といったのかも知れないが、どうもびったり来ないし、私にはわからない。「評判記」は、遊女、役者等の評判を書いた書物であるが、これに関係のあるのかも知れない。

岡崎「品川より江戸の入り口、片かわ町にて牛車の宿有」(江戸惣鹿子名所大全)の牛町で、牛車ひきの男たちが「評判をした」女というのは、品川の飯盛女か。不詳。

清「どら坊主の悪い女を指して「あれはもと天神の芸者だった」などと周囲の連中が「評判をしている」のではないか。

藤井「うし町が高輪で、品川通いの道とは判るが、そこで「評判をした女」とは何か。わからぬ。

高須「牛車が京都から江戸へ移入されて、江戸の重要交通機関となり。その連中に高輪の地を与えて、車町(俗に牛町)が

出来、その牛町に一時評判になったワカサのジョウという芸人がいた、などという事実はあるが、それがこの句と結びつくか、どうかわからぬ。

丸「今もって判らぬ句。赤穂義士の処刑後、義士の後家連中が、牛町をぞろぞろ通る句などあり、その中に特定の女があったのか、それとも当時何かそうした評判の女があったか、不明。

岡田「難解中の難解句。前々から、大家連も頭をひねって、ついにサジを投げた句。義士の後家の中には、うわさになるような女はいないから、或いは時事吟ではないか? 但し、礎稿の前田説は、この句の一つの手がかりにはなるが、まだキメ手にはならぬ。牛町辺に、何か話題になった女はいないか、小生もかねて気にして、文献をあさっているのだが、とにかく難句である。

75 とんだ事生酔坊主持にされ

五 鳥

前田「坊主持」は、荷物やものの等を、坊主に行きあうまでは交替で一人が持ち役になるあそび。「生酔」だからごまかされて、たびたび「坊主持」にされるのである。「とんだ事」がよく効いている。

高須「生酔いが、坊主持ちにされ」たのだから、仲間の数人が、一人の生酔(と言っても酒グセ悪く、しきりに悪所を恋しがる奴)をお荷物にして、とうとう坊主持ち(團體に行き逢うまでは、持ち主が代わらぬ運ばん法―遊びではない)にしたという句ではないか。それでこそ「とんだ事」

が利いて来ると思うのだが。

丸二高須説に賛。當時は道中の興に、坊主持ちがよく行なわれたものらしく、前記「川柳年中行事」野趣の処にも二、三句見え、「東海道中膝栗毛」などにも用いられている。

岡田二「生酔」とは、ちよつと飲んで酔ったのを言うが、大酔した人をも言う。この句では後者。もう歩けないぐらい酔っぱらったのを、友人達が抱えて行くのだが、これが大変な努力「こいつは、かなわねえ。坊主持ちにしようや」と、替わり合つて、抱えて行く。そんな冗談が出来るくらいだから、花見帰りか何かに違いない。

秋紅

前田二「仲条」は女医者に同じく、堕胎専門を業とした。仲条に堕胎をたのんだところ、罪なことだといって、安々と消すようにおろしてくれたというほどの意であるが、「罪だといってかつ消され」は、よからぬ仲条の風ほうがよく出ている。頷句をすこし。

今までの事を仲条水にする

(タル一九) (末四)

仲条は月を流して日を送り

(タル四八)

仲条ではったんからのことをいい

(拾八)

岡崎二「罪」だというのは、孕んだ子が罪の子というわけで、かき消す仲条が、己の所業を正当化しているのだらう。

清二岡崎説をとりたが。

藤井二仲条のむごたらしい職務を、罪だと批難したら「いや、世のため、その母親のため、私は金儲けのためにしているのではない」と、理屈をこねてかつ消した、女医者の図々しさを言ったものであらう。

川端二岡崎説に賛。「中条」はナカジョウ、チュウジョウで、読みに定説なし。

高須 ボクは藤井説「かつけされ」という言い方が「否定された」方にとれるからであるが、西原本でそこを「かつけられ」と誤校しているのも、そうとつたからであらう。

丸二西原本と岡田本の一字ちがいで、校訂ということの重要さが判つて、今更にむずかしさを感じているが……この句解については、私は先に見た西原本のひっかかりか、男の方が「罪だナ」と言つたのを、中条が聞きとめて「なに、罪なものですか、お歴々方でさえ、おろしに見えます。小の虫を殺して大の虫を、というじゃありませんか」などと、てんからかつ消され(否定され)たと解したい。「中条で」の「で」と「罪だ」の「だ」の語勢が、どうも我ながらしっくりした解とは思えないのだが……。

岡田 「中条で」は「中条において」の意で、中条へおろしに來て……である。「出來た子をおろすとは、罪なことですが」と、女が言つたのへ、女医者は「いえ、生まれたものを殺すのなら罪だが、まだ生まれぬ前の、いわば罪だから、別に罪なことではない」と否定したのである。——なお、川端氏に、中条の読みに定説なしと言う

が、小生は「末摘花詳釈」で、とうに定説を発表している。要は、初めは上方でも江戸でもナカジョウだったが、明和期あたりから江戸ではチュウジョウと呼んだ。(いつか写真で、お目にかけるが、明和期の本に、中条にチュウジョウと振り仮名してあるのが、ハッキリ見えるのを最近入手した)。

岡崎二この句が判らなかつたのは「かつけされ」が「否定され」た意であることがつかめなかつたからである。諸氏に感謝。

丸二中条へ來たのだから、おろすのは覚悟していたらうが、いよいよハッキリ宣言されて、今さらの如く罪の意識を深めた心境と見れば、納得される。

77 作兵衛様は御宿かと大晦日

一甫

前田二「作兵衛」は作病(仮病)の擬人稱。「御宿か」は御在宅かの意。いつも仮病をつかつて言訳ばかりして、借金をこたわっているが、大晦日にはあるし、今日こそ逃さぬぞというところを、このように会話的に面白く表現したのである。

藤井二賛。これでは、おちおち寝てもいられぬ……。

川端二賛。大晦日の借金取り。明けて元日は「ゆうべの病氣とそ敵で快気なり」

(傍初2)となる。

高須二「大晦日」とあるから、その点問題ないが、句がノンビリしているところ、強引な借金取りでなく、親しい友達が「おい仮病つかい居るか」とイキ抜きに來た風景と、ボクは見たい。

丸二礎解に賛。ノンビリしているところ

にユーモアがある。

岡田二だが、マンネリズムのつまらぬ句。

輪講誤植(前号)

14頁上段十一行目「刺ぎとる」ハ「刺ぎとる」 同下段二十五行目「山端二」ハ「川端二」

17頁上段末行「五日は軒に」ハ「五日に軒に」同三段四行目「名儀だけの」ハ「名義だけの」

バック・ミラー

本研究に関して、御意見ありの方は、どしどしお申し出下さい。二係

59の句について

富士野鞍馬

59 袖口をならしてちつと手をかきな前号、15頁下段の、この句に対して、ちよつと異見を申し上げます。——着物の仕立て上がり、また袖だけの縫い上がりのとき、袖口を持って、ゆるめてピンと張ると音がします。その出来栄を試験して、母か姑か師匠が、娘か嫁か弟子を呼んで、注意し教える状況と私は思います。

袖口を二ツならして嫁を呼び

(タル初、拾一〇)

袖口の仕上げは二ツ三ツならし

(タル二八)

バック・ナンパー

本誌のバックナンパーの株が天井知らず上つていますが、趣味的に製本される人達のために出来るだけサービスしますからこの機を逸せず在庫の有無を往復ハガキでお問合せ願います。



「山村祐」という作家

福岡阿彌三

河野春三氏から山村祐氏について随筆風に何か書いてくれという依頼があった。それは多分六月だったと思うが、ある重要な仕事を依頼されていた時で、その依頼を果すには、十二月一杯はかかると思った。従って、山村祐評を書くには、少くもその間に一週間を捻出しなければならぬ。加うるに、私は現川連の会や、氏の出版記念会で会うことはあったが、じっくり話し合う機会が不幸にして無かった。そんなわけで、氏の代表作とか、川柳家としての成長過程などを全然といていい位知らないのである。川柳新書第三十九集に氏の川柳と柳歴が記載されてあるが、一九五三年頃根岸川柳氏の指導をうけたというのであるから、

柳歴十年というわけである。元来私は柳歴何十年とかいうことに、あまり興味はないので、柳歴二、三年であっても、句に対する本人の姿勢と全般的な人間というものに非常な興味をもつ人間なのである。だから、他人を交えず、二人で差して語りたかと思っていた。そういうところへ、祐氏から一日閑を作ってくれないかという懇篤な手紙が来た。懇篤という意味は、君は急しいだろうから、はるばる茅ヶ崎のあなたの家へ出向いていいという文面であった。生憎老母の病気で都合が悪いので八月十七日祐氏の家へ出掛け、じっくりと話し込んだ。

若し普通の川柳家との話し合いたと、最初から川柳はどうあるべきかとか、こんな句はどう思いましかとか、超現実主義はどうなんだとかいう話になるのであるが、私はそういう話を余り好まぬし、また、そうした題目は倍屈した話になり易い。私は祐氏の書架にひよいと目をやったら、三太郎先生の「孤独地蔵」があったので、この句集をどう思いましたかと訊いてみた。氏は、この句集は、年代順になっていないので、三太郎氏の川柳についての成長過程が分らない。だから、戸惑ってしまうと言われた。私は、先生の句は、三十年代拝見し続けているので、直ぐ何時頃の作だということは分ると答えた。そして、実は先生の豪華なこの句集を戴いて、私は、長いこと悩み眠ってきた川柳の伝統の鉄

壁は、これであつたのかと筆で、二つ三つ叩いたんだと話すと、祐氏は、その気持よく分りますと點頭してくれた。伝統的の川柳でやっていたら、窮極として、この句集に達するだけだ。勿論これまでに達することは容易なことでないのも明らかであるが……。

そこで「孤独地蔵」の終りの句に、三太郎先生自信満満、勿論世評も非常に良かった「一匹狼」の句に話頭を向けた。岩本具里院氏も「一匹狼」という文句が好きだと言っているが……。祐氏は「私も人形劇の脚本にこの言葉を使いましたがね」と来た。

「この「一匹狼」が三太郎先生の創作であるなら、私はちよいと尊重するんだけど、直木賞をとった寺内大吉和尚が、朝日新聞だかに「僕や黒岩重吾、池波正太郎等

はみんな文壇の一匹狼でやって来たのだ。いくら書いても芽が出ず、従って筆では飯が食えず、社会から疎外されたような環境で、吠え続けて、事があつたら咬みついてやろうという気概でやって来たのだ」と書いていたが、先生もそれを知って居られて、この句は出てくるんだ」と私は答えると、「いや、僕もそのことを何かで読んだ、頭に残っていて、脚本にも使ったと思いますよ」と極めてフランクであつた。そういうフランクな所は祐氏の最も好ましい性格の一つであると思つた。それから「一匹狼」としてもね、現代の日本では、狼というものは絶滅している動物で、象徴的意味しかないんです。朝鮮のヌクテという狼も殆ど絶滅しているし、アメリカのコヨーテ、それから屍肉を喰うハイエナ位かな、今いくらか残っているのは……」と私が話しかけたが、氏は狼族のこういう動物の名を知っておられたには驚いた。シベリヤのバイカル湖で海豹が獲れることを私に知らしてくれました。かくの通り、氏は博学多識であり、エジプト、ユーゴ、チェコ、ルーマニア等の話は直接氏の眼で見て来た強味が話の果てに感じられた。

氏は、口語短詩としての川柳が、現代の詩として堪え得るか否かについて興味を抱き、「川柳私論」を出して居られるのであるが、単に興味を抱いているだけでなく、口語短詩として成立するという信念をもっているらしいのである。ロダン、ブルデンと並ぶマヨールでさえ、本当の芸術は、貧しい手段で、深いものを表現することだといっている。フランスの絵画、彫刻をみていると、確かにそういうことがいえる。祐氏

が、地方の民話に非常に興味をも
って居り、人形劇に於ては、指導
者の地位に居られる意味が私に分
るような気がする。

また氏には、『フロックコート
と勲章』だと思いが、自由詩の詩
集があるが、元来は詩人なのであ
ろう。自由詩の立場から見ると、
川柳という形式、特に五七五定型
というものには特別に興味と疑問
を感じられるのであろう。そのこ
とは、川柳「しなの」にその研究

の一端が掲載されているので分
る。私のように、川柳一本槍で、
しかも形式には手を触れずに、川
柳を内容的に詩として成立させる

ようにしろという西脇順三郎氏の
忠告を守って来た者には、そうい
うことには気がつかないものであ
り、また形式まで考えていては、
川柳を詩として育てている際に、
その暇がないということも、率直

に述べておこう。超現実主義、或
は、超自然主義という言葉を川柳
界に紹介したのは、私であるが、
体でこれを川柳に嫁がねばならな
いので、形式関係まで手を伸ばす

余裕がなかったのも事実である。
氏は自由詩の世界におられていた
ので、超現実主義とかいうことに
ついては、相当造詣が深いのであ
る。だから、私がこれについて色

色述べたが、比較的スムーズに話
すことができた。御会いして非
常に快適であった。普通の川柳家
と話しては、こうはいかな
い。普通の川柳家と超現実主義に
ついて語るとは、実にわずらわ
しい手間が掛かるからである。祐
氏も私の言うこと、即ち、正気の
人間が、どうして人工的に狂気の
状態を作り出すかに、詩の難しさが
あるということに、まことに当然
という同意を示してくれた。こう



『超詩私論』の著者 山村 祐氏

いう理解をもった川柳家がいると
いうことは有難いと思う。

私のような勤め人の目から見
ると、氏は非常に恵まれた環境に居
られるように見える。時間的に私
ほど縛られて居ず、三人の子供さ

が通ずるので、御会いして非
常に快適であった。普通の川柳家
と話しては、こうはいかな
い。普通の川柳家と超現実主義に
ついて語るとは、実にわずらわ
しい手間が掛かるからである。祐
氏も私の言うこと、即ち、正気の
人間が、どうして人工的に狂気の
状態を作り出すかに、詩の難しさが
あるということに、まことに当然
という同意を示してくれた。こう

んも皆立派に育って、独立されて
居り、商売は御繁昌のようである
し、寢に羨ましい気がしたが、反面
身近に絶えず刺激を与えてくれる
同年配の句友が居られぬというこ
とを、こぼして居られた。その点
私は恵まれて居る、北村雨垂とい
う句の執念をもった友人がいる
し、いつでも川上太郎という伝統
派で育ちながら、新しい川柳を絶
えず求めて来られた執念の師に甘

ぐ気分が弛んでしまうからであ
る。私は二、三年来、横浜で、雨
垂、懐窓、三太郎と四人で刺戟し
合う会のようなものを、一月置き
位にやって来た。三太郎先生御病
気後は、その会も出来なくなった
が、七月から、再びやろうと雨
垂、懐窓と語り合い、片柳哲郎君
を入れ、日本画家の小島一齋氏
（旧帝展無鑑査）にも来て戴い
て、皆の前向き姿勢を作り出す
ことにした。今度は山村祐氏にも
来て戴こうと思っている。

川柳家が集まるということは、
句会しかない。私等は川柳の事な
ど言わなくていい。少くも奥底に
芸術と繋がりのような話を色々や
ろうと語り合った。一体に、川柳家
は話題を余り持っていない。これ
からの川柳家はこれではいかぬ。
この点についても祐氏は賛意を表
してくれた。つまり、今迄の同一
課題について、競吟し互に刺戟し
合うということには、一つの限界
が来ているから、川柳家をもっと
肥らせるには、今言ったような新
しい刺戟法が必要だといっているので
ある。そういうことをやっていくに
は山村氏のような人は、極めて大
切な川柳家だと思う。

ここまで書いて来て、まことに
奇妙な山村祐評になってしまった
のに気付いて、少し後悔めいた気

分になったが、山村氏は普通の川
柳家の評のように書くには、違っ
たいものを持っている人物なの
である。これからの川柳を肥らせ
る要素を多分に持った人物なので
ある。それが私にとって一番大き
な魅力である。非常に合理的な緻
密な頭脳の所有者でありながら、
それを突き抜ける文学的思考をも
った人物である。それが魅力であ
る。

実作品についても、将来希望が
持てる素質を多分に持っているら
れるという予感が私に浮かぶ。これ
がやはり一つの魅力である。



ココロ
便箋



死にぞこない と川柳

東野 大八



わたしがいいよ臨終となり、その生物としての主体性を喪失するとき、きつとその昏迷の暗夜の底に浮ぶのは、きつと川柳の句の幾つかにちがいない。

十八年前の戦場でも、半分息の

根が止まりかけたとき、わたしはいくつかの句を口ずさみ、そして夢中で作句のひとつを過ごしていた。もとより半死半生の最中だけに、そのときの脳中に去来した句は一切記憶にはない。わが身がとっていたそうした「行為」だけが、ハッキリと頭に残っているだけである。

古語にも「人の死すときの言や

まことによし」とあるが、鬼畜に等しい人間とても今わのキツとなれば人並に殊勝なことを口にし、その気になって死のうとする。これが死というものの純粋性というものである。

わたしの場合など、川柳に限らず、ありとあらゆるその瞬間までにわたしの経験した事象が明滅しつつあったのだが、その場合川柳の句の幾つかが、どこか脳中に息づいていて、図らざる形でぐいぐいと眼前にとび出してきたことには今もわたしは愕いている。人生のバカンスやレジャーのつもりでいわば「生きる」という生活力の

本筋から、本来ならば無縁らしいこうしたものが、その人生の終末において、他の事柄よりもはるかに大きい比重を占めて、その人間の思念の場をかきさらっているということは、驚異に近い。こうなるとその人間の生活のすべてを埋めつくした「職業」というものが案外なほどカゲが薄く、その死の瞬間においては最早雲か地中の水のごとくあえないものであることも知った。これも愕きである。

要するに

「私の趣味は川柳でして……」とコトもなげに笑う人が、案外結論からいうと、川柳いっぱい頭の頭で死ぬ。川柳とは限らない、碁、将棋、花札、俳句、ゴルフ、謡曲、つり、パチンコ、競輪、なんでも同様だ。もつとも、そのポリュームの度合は、精神こめてどこまで打ち込んだか、というウエイトの問題につきる。ホントにお遊び、チョイト気楽に、そんなことで一ときを過ごした人にはこれが全然ない。出ても〇・〇〇一秒ぐらいのワンカットがいい方で、何かの

「ついで」に現れてくるそんな程度だ。

年期の入った川柳作家は、例外なく川柳を末期の水のあとさきに必ず川柳のムードの中で、まるでそれは四ツ手網の真ん中の魚のように、川柳という句の結び目の上であの世へ行くのである。

カレッツな大激戦の中で九分九厘まで死んだ男と、陸軍病院の生活の中で話し合ったことだが、彼等は一様にこんなことをいう。

「元気に生きているときの頭で考えやすいことがらはからつきし死に損いの頭には出て来ない。忘却の彼方にキレイサッパリとふり捨ててきた、ゴミくずのようなことがらがさも大事そうに、金紋さし箱で登場してくる。たとえばコードモのころ、メダカとりに行ったとき、水底でひろげた日本手ぬぐいの絵模様とか、はじめて女郎買いにいったとき、引つけ茶屋で見たつまらぬ懸軸の山水だとか……」

生活水準のきわめて低い、ニコヨンか、トビ職の下どりみたいな、字もろくすっぽよめないような連中はこれに似たような他愛のないものばかりを見出すようだ。わたしの場合などは、紙をニツ折にしてモノ差しでも切ったような、切り目のケバだった長い句

笑がまず現れ、壁に幾つも垂れ下った白いものをみた。句会の席題や兼題のことと知れる。もつとも書いてある字は一切不明。つぎに人間だが、これはホンのひとつまみほどのものに限られている。この人間たちは一番キライな奴ほど眼鼻立ちがととのっているから妙である。

ワンサカ、ワンサカと雑音がきこえたと思うと、ガビ山の山の中に、夜半独りで岩角に立っているような気分になったりする。風の吹きようで木の上にかけてあるマイクの音が右へ行ったり左へ行ったり、時には高く、時にはきこえなくなる時があるが、あのような聴覚が絶えずくりかえされる。

ワンサカの音がさかんだと気分的にハッスルするとみえ、さかんに手の内の句箋とニラめつこ、名句ごさんなれ、と気負い込むが、深い水底のしじまになると句想がスイ、スイと酸素ボンベのもれた水玉のような具合で水面に向って飛んでゆく。これに酔ってサッパリ句箋には書けないのがこの場合の特徴である。書こうとすること、句箋にぜひ残さねばならぬ、その発想と表現のつながりが一切ないのが、この場合における最も大きな特質のようである。それでいいのか、わるいのか、というこ

とすらもその人間の意識は働かない、それでいいようにできているのかもしれない。

大工職で終生を過ごした人間は決してカナヅチやカンナはみない。その本筋と別なもの、それが非常に身幅をとる。ノコギリやノミを使う作業をするのは、そこに居合せた人間が命じるか、その道具に関連した他の事柄によって行われているのである。

現像液にしみした白いものの中から、次第にモノの形が明確に形づけられていく過程が人間の魂の作用と端的に表現できるが、この現象の支配力は、意識以前に脳細胞自身が意識した度合が最も高いものになって現れるのが人間末期のアタマの症状である。脳細胞の個々のグループが。空間の好きなところで豆電燈を点滅し合うような調子で、ここには一切横のつながりはない。電源は一つだが、そのコードの途中の接触個所が異っているのと考えればよい。

川柳は人間詩であり、魂の中からひねり出された「生命ある句」を作る者は、その句の水準の高低は別として、その烈しい意欲が必ず脳細胞の一つに影響している。新らしい「すずこ」(鮭の卵)が一皿に盛られて出てくるとき、その一つ一つが新鮮な色艶であ

りの灯かげを一つ一つ美しくくわつし、光りかがやいている。考えることの好きな脳細胞のそれは健康な姿であり、在り方である。みんなと考え、みんなで光り一皿の味覚となって空間に充実した何かを訴えつづける。この協同作業が人間の健全な頭脳を形成している。

ところがこれが悪くなつてしまひていくにつれ、部分的な活力だけをもち一塊の物質にすぎなくなる。臨終の人間の意識モローはこういう状況を呈する。一番多く光りを吸い、最も多くギリギリのものを生み出した脳細胞だけが生き残る。川柳に年明をかけ、それに生甲斐を見出し、死ぬまでそれとともに人生を全うした人の頭は、すべて川柳だけの脳細胞が残る。疑ってそれがどたんばの一句となつて辞世となる。辞世の句を生みやすい条件は、少くともこういうことでなければ句にならない。

日ごろのわたしに似合わず、こんな心理学的駄文をつづるのも、わたしの知人が死去するとき、そのまくらもとで坐つてその顔を眺めつづけていた神経のなせるわざである。

「どこかで誰かと、これと同じようなことを経験したことがある」

あなたはある日突然に、こういう感覚が脳中にヒラめくことはありませんか、これが生命あるものの実相であり、脳細胞個々の一つの働きが一瞬強まって他を支配したこれは一瞬ではあるまいか。どうもくだらんはないをしてすみません。秋の夜はながいものですから……。

現代柳人録

- (一) 姓名 (二) 雅号 (三) 別号
(四) 現住所 (五) 生年月日 (六) 出生地 (七) 職業 (八) 電話 (九) 自叙の句一句 (一〇) 川柳以外の趣味 (一一) 配偶者の有無 (一二) 川柳に手を染めた年月

(208) 林 邦治

- (一) 林邦治 (二) 夢虹 (三) 一
(四) 豊中市本町九丁目五十一番地 (五) 昭和十三年三月七日
(六) 大阪市 (七) 書籍店勤務
(八) 一 (九) 二十三で死ぬ女の女名はリカ子 (一〇) 読書、バラ、甚、音楽、演劇の鑑賞 (一一) 一 (一二) 昭和三十三年五月頃

(209) 岡田 俗菩薩

- (一) 岡田徳次郎 (二) 俗菩薩
(三) 一 (四) 広島市横川町三

- 丁目七二九ノ一川崎教登方 (五) 明治二十七年一月二十日 (六) 広島市木挽町 (七) 会社員 (八) 一 (九) おおらかに成れと大梵鐘が鳴り (一〇) 将棋 (一一) 一 (一二) 大正十年十月

(210) 下山 清潮

- (一) 下山清 (二) 清潮 (三) 一
(四) 茨木市大字郡八三六番地
(五) 明治三十二年九月二十二日
(六) 岡山県津山市福井一四一四
(七) 会社員 (八) 一 (九) 君見給へ女一人は静かだろ (一〇) 魚釣 (一一) 有 (一二) 昭和二十年四月

(211) 丸川 初甫

- (一) 丸川初子 (二) 初甫 (三) 一
(四) 芦屋市船戸町二番地
(五) 明治四十一年六月十一日
(六) 京都市下京区桂屋町通り五
条上ル下鱗形町五四〇 (七) 国鉄
職員 (八) 神戸7局〇八〇七 (九)
旅費だけで済まぬ故郷へ遠ざか
り (一〇) 茶道・華道 (一一) 有
(一二) 昭和二十二年八月

(212) 佐々木 鳳石

- (一) 佐々木直 (二) 鳳石 (三) 一
(四) 名古屋市名古屋市中川区二女
子町五丁目六十五番地 (五) 明治

四十年十二月二十二日 (六) 愛知県北設楽郡津具村 (七) たばこ・青果食料品 (八) 名古屋36 一三
八〇・三九四五 (九) 高原の母娘
都会を羨まず (一〇) 推理小説・
写真・旅行 (一一) 有 (一二) 昭和四年八月

(213) 越智 一水

- (一) 越智一水 (二) 一水 (三) 一
(四) 今治市大新田五六五
(五) 昭和四年九月二十九日 (六)
今治市大新田五六五 (七) 公務員
(郵政) (八) 一 (九) 一 (一〇)
洋画 (一一) 有 (一二) 昭和
二十三年一月

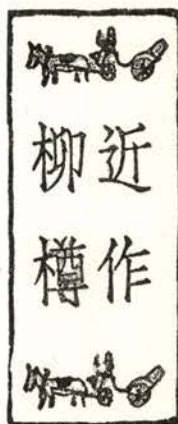
(214) 平尾 太希志

- (一) 平尾猛 (二) 太希志 (三) 一
(四) 大阪市南区日本橋筋二
の七〇 (五) 大正二年二月二十二
日 (六) 岡山県倉敷市 (七) 医師
(医博) (八) 一六四三 (九)
伏屋にも一月一日の日の光 (一
〇) 甚・剣道 (一一) 有 (一二) 昭和
三十四年四月頃

川柳雑誌社特製

投句用 柳 箋

一冊 (五〇枚綴) 三〇円
送料 (二冊分) 二〇円



麻生路郎選

北川春巢選

良い奥さんらしいあれから飲みに来ず 枚方市 宮川 珠笑

値上りの野菜へ種の値も上り 同

初孫へ寡婦が笑いを取りもどし 同

脱税へあんたええコネおまへんか 同

おじさんを味方に気強い恋すすむ 同

実家なり妻は長女の重厚さ 倉敷市 水谷 谷水

刑務所製ですよと太鼓判押した 同

夏羽織まだもっている未亡人 同

良心がおり訓話の冗漫さ 同

逝った子のほっぺにも似てはうすきの 同

世の禍に負けまい朝の靴を拭く 尼崎市 北国日出雄

あの時は潔白だった遠花火 同

角帽を捨て大阪弁がうまくなり 同

借金を返してからは見離され 同

宿題へ本気になった父の顔 同

けちくさい人からしほる腕をみせ 大阪市 林 宏子

裏切らぬことも子供のためですの 同

雑魚の方が幸福にくらした 同

片言の坊やも家風のぞかせる 同

ぶらさがる鉦へ奥さん実家ですか 同

石仏昔は願聞いてくれ 今治市 越智 一水

教え子の方が給料高うとり 同

旅行会などとブームにのせられて 同

借物をしてお返しが高くつき 同

くすり屋の店先俺のことを書き 鳥取県 鈴木村 颯子

退職のまだ顔のきくつもりでい 同

扇子まだアクビのふたに持つて出る 同

商売熱心と欲の深さをほめられる 同

孝尽くすつもりが孫の守りをさせ 加賀市 木村 一路

針を持つ老婆若さへ振り向かず 同

墓 参

魂が触れ合う盆の香を嗅ぐ 同

骨壺の我が座も空けてある墓石 同

大臣の卵も混る希望号 京都市 大久保和三郎

冷蔵庫バカンスにして秋が老け 同

役者

川岡 靈眼子



私の知人に元東京都台東区上野桜木町に梅沢昇という剣劇役者がいた。本名を花田繁蔵と云って福岡県の小竹という炭坑町の出身の男である。彼は後、東映に這入って現在京都市東山区安井通り北門西に居るという便りを得ている。彼は芸の小やかな男で九州のドサ回リから沢田正二郎亡き後の帝都剣劇王とまで一時はいわれた浅草の寵児だった。一行七十人から八十人位の座員がいた。霊学でいえば芸名を沢正とか阪妻とか嵐寛、板健など略名の出来る者が大衆に愛されるといわれているが特にこの梅沢昇も梅昇(ばいしょう)と呼ばれて大衆に人気がとてもあった。巽になくなった作家、長谷川伸さんなど特に彼を愛されて伸先生の愛弟子といわれる村上元三氏や山手樹一郎氏、九州佐世保出身の穂積驚(はすみはる)これは私と同じ佐世保商業学校出身で、いわば私の後輩であるがこんなのが梅沢に座附作者としてついていた。今は何れも天下に可成の名を成しているが駆け出しの頃は何れも梅沢の厄介になっていた。彼の座附作者はこうした有名な俳優が一人に彼の後に続く有名な俳優が一



地下足袋でぶつきら ^ら に小銭借る	同	足許がとほつき株が新安値	同
辻までは急がぬ足で借りて去に	同	両方の名前を決めてお産のび	同
からみ来るもう耐からも見放され	竹原市 松井 可笑	百葉の長とは家族皆言わす	岡山県 秋野 萩路
腕はあるかあるかとうめく救急車	同	支店長に栄転支店の掃除する	同
進学をあきらめさせて涙ぐみ	同	還暦のここから盆栽党になり	同
草の実がズボンにからみ生きんとす	同	入場券庶務から配り社長発つ	大阪市 藤富 淀月
村平和へちまぶらぶら下げ床屋	仙台市 平野 光道	不渡りのせめて四五日温泉に浸り	同
肩書が上着とらせぬ暑い席	同	もうワニに飽いたかバンドトカクにし	同
故郷の土やわらかし破れ靴	同	雨男葬式にまで雨が降り	兵庫県 斎藤たけお
満足に税も納めず政治論	同	軍歴に似合うた葬式派手に出し	同
仏などかまっていけない盆踊り	布良市 古谷まさる	パチンコの帰り電車で本を読み	同
聞いた事云っただけに辞職とは	同	虫かごへ住めば都の声で鳴き	見島市 伊丹柳瓢子
謡曲を聞けば戦さも亦楽し	同	犬にやる肉を電話で注文す	同
坐るにも立つにも気力いる日なり	新居浜市 小林 孝正	朝顔のつるアンテナの高さまで	同
直す気でこわしポンプ屋呼びにや	同	大盛会うれし善意の借が出来	竹原市 山内 静水
月給はみなとりあげていて愚痴り	同	馬鹿になれなれと地の声陰の声	同
農業で住みにくい世だと田螺まで	高知県 山川 勝子	目に見えぬ善意お世話をして判り	同
鏡にも秋の足音肌が荒れ	同	ラブレター書く夜の影も孤独なり	兵庫県 常岡 孝風
記念切手貴重な朝を列ばされ	同	ちびちびと酌む酒虫がこんばんわ	同
嵩上が出来颯風が待遠い	戸屋市 里田一十	背のまろき母上様や職がなし	同

人も出ていない。彼は人間の業の深い男である。二代目を継いだ梅沢昇も元は沢田正二郎丈の直弟子で原名を河合勇治郎といつて今の新国劇の芯を取っている島田正吾の兄弟子であったが今は名古屋で中風で病床にあり、再起おぼつかなく、また福井哲郎も影もなく、梅沢勝次郎も今は何処か全く不明、東昇次郎も、東映にデビューした梅岡昇次も若くして惜しくも死んだ。彼等こそ梅沢昇の跡に続く者であつたらうに、よき弟子をこの梅昇は残し得なかつた。

よき弟子もなくて忙しく六十年

役者は今でこそ俳優といつて立派な芸術と呼ばれているが昔は河原乞食といつたものだ。或る人は瓦乞食ともいつた吾家に落ちついて生活の出来ない葬らしで旅を回るからである。以下私の詠んだ川柳で知つて頂くことにする。

汽車賃がどうのこうのと旅がらす

瓦の下生活即ち自分の家に落ちつく生活を恋ゆるという意でもあろうが本当は昔は小屋らしい小屋がなかつたので錠張りの青天井で興業したので丁度河原に棲かうを食に似た生活から出た河原者という言葉である。

剣劇の創始者は沢正で真剣を使つたというのが明治大正期には壮士劇というものがあつておおむね竹光を振り回した。

竹光でまたも喰う風の旅役者

それでも都会人の常設劇場では観衆の眼が肥えているから大根といわれる端役でも緊張しているが田舎小屋掛けや公民館などでは、



御先祖の徳とも知らず村議長	松江市	内藤	喜夫	ほんとうの余裕便所を改造す	大田市	林	緋砂子
美女才女二人も持って父困り	同	同	同	秋の月うれしい色に君が見せ	同	同	同
姫百合の如くと言って気に入らず	同	同	同	勉強をせんのに机だスタンドだ	奈良市	村上	春己
童心にかえりオニギリ交換し	竹原市	杉原	愛鳩	台風にかうた様にサギに会い	同	同	同
冷房で風邪ひいたとか小気味よし	同	同	同	宿題も暑さも残り新学期	松原市	守屋	万竿
催促にゆけば夜釣りに行った留守	同	同	同	年寄りをいたわり娘赤くなり	同	同	同
責任があるわ女房の白髪にも	岡山県	阿部	良江	田の渴く土用へ一家病み続け	竹原市	大洲	大八洲
正直に言わぬ女となりにけり	同	同	同	祝賀会つたない三味も引き出され	同	同	同
平凡に平凡にと母願うらし	同	同	同	年代を偲ぶ鞆が先を行き	岡山県竹原市	森本	黒天子
台風を追加予算も待っている	静岡市	多々良	英舟	老年と云われさからう気が起り	同	同	同
日本中汽車ばかりなる時刻表	同	同	同	月給日関所のようなカンパあり	広島市	上代	美文
にくしみを捨てればゴキブリの艶のよさ	同	同	同	満二才長女女のしぐさする	同	同	同
時にふと妻しおらしくレース編む	香川県	三井	酔夢	命あつての物種悪に荷担する	宮崎市	野口	叩之助
佗しさよ夫婦に話題ない夕餉	同	同	同	スケッチのこころ昔は要塞地	同	同	同
頬染めて女理性へ猪口を伏せ	羽野市	稲本	凡子	ただ横を向くにも父母の手を借りて	岡山県	梶川	信子
香水をベットへふっている格気	同	同	同	姉さんと呼ぶ人遠い空の下	同	同	同
スーパ―へ入って一円価値を知り	市市	三宅	ろ亭	せめてものレジャー帰りのコップ酒	愛媛県	村上	石峰
朝起きは三円の損煙草喫い	同	同	同	お茶を汲むだけの後妻で物足らず	同	同	同
吊り上げて置いて公僕又値上げ	新設市	安藤	桂仙	ただ一人戻れば落葉の道続く	玉島市	井上	旭峯
犬の子も育ちが知れるなつきよう	同	同	同	世の中を真面目に生きて回り道	同	同	同

田舎では馬鹿にする気か目が動き

きよろ／＼と観衆の中の好きな人捜しをしているのが目立つ。

だいこんは人数かぞえて舞台に居

何人這入ったかな観衆は……それでも客は熱心にこの劇を見てくれている。

ちらほらと咳もなくして客の群

減多に見ない田舎ではこんなのも眼に映える。

足によし手によし派手な芸一ツ

こうした劇団の弟子達や新入飛込役者のたいていの者が一応は副座長級の後見役の世話を受ける。

梅沢劇団には今でもテレビやラジオ放送に出る東京都新宿区柏木町に住む藤岡肇さんがいた。地味な人柄だ。

青年を牛耳る頭群を抜きやわらかく世渡りした軀の晴れの位置

である。若い青年部のその中で少し役がついて、

殿様の衣裳よいのがいちつち下手

となるが座長はたいいてい、この座の経営者であり、演技指導監督であり中には原作もやる。つまり資本家と労務者の兼任という仲々威勢の良い権力者だ。

左から右から座長斬って捨て

先生は今日もまたまた惚れられた

である。そこにいくとビリは辛い。何へんも斬られて喰う気の



表情が変ったとこで母が折れ 岡山県 永宗 宗義
 ギ印抱く愛のまなこをしよぼっかせ 同
 噂の音速に口あいたまま あいたまま パルワット 斎藤 流路
 社用族胃薬だけは自分もち 同
 人生を二軍のように療養す 群馬県 古川 静波
 ロダンの接吻芸術に見るも年 同
 美しく生れくすりに縁があり 大阪府 山田 李鳥
 玄関をしめて新妻淋しがり 大阪府 松田 つげ
 俺の影とうもろこしに似て忙し 松江市 岡崎 祥月
 雲切れしもつれし糸の解けぬまま 大阪市 坂川 秀子
 盆に憶う生んで育てて死なせた子 香川県 伊藤 歌子
 掛時計大きな鼻の孔で見る 石川県 大山 雅城
 く字型手押し車が杖となり 茨城県 高木繁太郎
 鉄持てば黠三等へ遠くなり 笠岡市 谷本純愚坊
 僧侶を副業にして役場員 京都府 西村句楽坊
 古本の様な頭の社長もい 七尾市 松高 秀峰
 夢があり詩の目句の目で仰ぐ空 神戸市 吉田 隆史
 鉢植えが好きでさらさら野心無し 大阪市 西本 保夫
 無銭旅行なんて不思議な奴もおり 石川県 南 伝一
 人生とは何ぞや仕事手につかず 八戸市 川村 映輝

初恋に似た悲しさよ花火きえ 大阪市 銭谷かをり
 おかまいも出来ぬ座布団敷いてく 玉島市 水粉 千翁
 云うことにソツがないのも肩がこり 新居浜市 賀本 昇
 堪忍の緒が切れましたたねずみ取り 大阪市 宮尾あいき
 秋風に頼なぶらせる悩みごと 松江市 岡崎 雪美
 愛をとく宗教がもと和を乱し 大阪市 北中 ふじ
 クモの巣もはって一家の主婦は病み 大阪府 石田 新石
 ステテコで一塁守る草野球 今治市 八塚三五島
 呉服部の娘も遂に売り切れる 九亀市 平沢柚蘭坊
 風鎮の重しをつけて雁の軸 大阪市 万代句念坊
 毛を染めて売春法に抵抗し 神戸市 大野木真砂
 ラブレター十六才を慌てさせ 鳥取市 近藤 昭夫
 飯よりも好きと飯にはならぬ事 今治市 葛本 昌道
 ゴム長に週休がくる世の移り 大阪市 福富 隆子
 封建のバチが師匠へまだ残り 宝塚市 山本 定男
 不孝した子が自家用にのせてくれ 大阪市 武居寿美司
 家政婦の親切金の値打だけ 金沢市 根上 杏花
 五分五分と云う生活の共稼ぎ 大阪市 森川すみれ
 平均年齢が延びた療養所で秋 羽咋市 北山耕人庵
 美容院鼻のひくさへ泣かされる 大阪市 新谷 深子

馬の足
 だいこんは出る間もなくして
 入る菜屋
 斬られて許りでは癪である。た
 また貰った役柄で鬱憤を晴らす
 ことになる。
 弟子がなる親爺の役で怒鳴
 りつけ
 さて、私は或る日彼等の集う華
 かな横浜市弘明寺観音様附近の梅
 沢昇所有の劇場を彼の好意で訪問
 した。
 横浜はこんなところかと不図
 想い
 朱塗りの劇場の表造り稻荷社殿
 みたいな古屋だ。
 拍手を鳴らして見たい古屋
 構え
 まあまあと招じられる儘に彼の
 友直に癒ゆる。
 旧情から湧く泉あり情の炎
 先ず菜屋に一步を印してみる。
 段様があぐらかいてる菜屋
 部屋
 そのまた向う側では、
 殺された筈の与一兵衛めし
 を喰い
 ちよっと生理をもよおしてトイ
 レに行けばありやありや、
 いす方の御姫様かや立小便
 まあまあ座長自らの接待に自らを
 慰撫して、兎にも角にも彼独特の
 至芸を観ることにした。森の石松
 は日本一の称ある梅沢昇の芸。石
 松は梅沢、梅沢は石松といわれて
 いる位、定評のものだ。
 いつまでも生きてる石の至
 芸観る
 彼は小粒の身体の役者だった。
 細い線を大きく観せて芸は
 活き
 流石、
 今日までを何に例えん苦勞
 人であった。



句 評

リレー

香 庫 子
紫 文 風 子
川 野 薫 没 食 子
黒 長 橘 高 場
豊 中 市
今 治 市
大 阪 市
大 阪 市

どさ廻り座長は女盛りなり

静 水

紫香―古さを感じるのは上五に
「どさ廻り」ともって来たためと思われます。一座の座長ともなれば女でもそれ相当の風格も必要ですし、たっぷりな色気も……女盛りがよくそれを現していると思います。

文庫―不良の少年が盛り場をのし歩くことも「どさ廻り」というそうだが、この句の場合は地方廻りの劇団の座長のことはっきり分る。併しその座長が「女盛りなり」では川柳にならないではないか。これは単なる説明にすぎない。
薫風子―「どさ廻り」という語彙を用いる可、不可は人各々の川柳に対する考え方の相違だから、どうこう非難することは出来ないが、庶民的な文芸川柳には「どさ廻り」という語も意に介することなしとする作家、価値の高い作品を成すには、すでに落伍者的な語彙ではないか、出来る限り避けるべきだとする作家、まちまちであろう。

この句、女座長が、年令的にも或は芸の上でも今が盛りであって、小さい一座ながら芝居の雰囲気には熱が盛り上り、観客を楽しませてくれる。

そういった一座の有様を女座長

の単的な描写で或る程度は出し得

ている。「座長も女盛り過ぎ」とすると別の一面の一座の哀れが強調されることになるが、原句の方が私には趣きがあるように思う。

没食子―上五に「どさ廻り」ともって来たところに、この句が説明的に流れる因果要素を含んでいる。しかし「女盛りなり」でとにかく一応句の型を整えたと思ってい

いだらう。女座長で然もその女座長が女盛りであるために劇団の売れ口もついて来るし、一寸した人氣も盛り上っている。薫風子氏説の如くこの女座長が年令的にも芸の上でも、今が全盛期であると解して一層味が出るようだ。でも飛びついて手の出る句でもないように思う。

紫香―「どさ廻り」で相当論議が出ていた様ですが、結局没食子さんのいわれている事につきると思います。

文庫―本復で元之の如くに客くなり―という古川柳から一歩も出ていないのではあるまいか。この句の場合、女座長を他の何かに置き変えても矢張り何とか理由づけられるもので、女座長である必要もないし、その女座長の年令もさほど重要では無さそうだ。とに角余り意味の無い句である。

薫風子―句評を担当する度に思

うことだが、自分が選んだ句の評であつたら心ゆくまでの評が出来

るであらうにということである。併し評を受け持ったからには突き放したような評はしたくない。少しでも良い所を見付け、善意のあ

ふれた温い評をしないと念願しているが、皮肉にも大抵の場合評のし難い句ばかりが当るよう感じられる。

ふるさと夜の便所へつれ
が要り

珠 美

紫香―ふるさとでなくとも知らない山の宿等では便所へ行くにも

つれが欲しいと思う事があります。ぐねぐねと曲った廊下、やったとどろついた便所が真つ暗ら、ここで月と虫でもあれば風情があるのですが、この句はこれだけのものではないですか。

文庫―夜便所へ行く場合それが「ふるさと」ではビツタリしない。ふるまの家が改装されて戸惑うことも考えられるが、凡そふる里という以上、恐ろしさを感じない。迷うこともないのが通念であって、連れなにか要らないと思うのである。映画館の便所でいたずらされたり、学校の便所で事故がよくある時世だから、そうしたことに就て句にするのが適当ではあるまいか。

薫風子―女姉妹の帰省と想像も

肩こり・神経痛
筋肉痛・腰痛
疲れ目・便秘に
●アリナミン
●無臭性アリナミンF

疲労・疲労の 活性持続型ビタミン

疲れ！アリナミン®

されよう。或は娘が故郷の母親をうながしているともとれる。とにかく女人でなければならぬ。若い女人と受取れる。田舎になると廊下伝いどころか、庭を距てて荒壁だけの便所であつたりする。夜、不慣れな家の、併も便所へである。都会の若い女性の心理を、この句は確実に自然に伝達させるが、私個人としては便所という字句が氣に障った。便所という語句は神経のず太い字句だ。十七音字の文芸には溶け込めない字句のよう

に思うのだが。

没食子―「ふるさと」は農漁村の一寒村と解したい。農村も段々近代化して来たが、便所は外に有るところが多い。それだけに月夜は月夜なりに、闇夜は闇夜なり

に、馴れた戸外とはいえ神秘的な夜のとりの中へ出るの一寸した勇氣が要る。懐中電氣を点けていても「ゾッ」としたことの経験は僕は持っている。とにかく夜の田舎の便所は薄気味悪いものである。それでこの句のようにお連れが欲しいのである。「ふるさと」は帰省者を現しているし、また生れ故郷がこんな寒村であると、都会の人となった人の物語り位にとれる。

紫香「ふるさと」といっても都会すれしたものにはたとえ生れ故郷であっても感じ方が違ってしまっているのではないでしょう。またこの句の「ふるさと」はあなたが実家でなく親類か知人の家という見かたもあります。

文庫作者がこう感じたとしても誰もがうなずかない場合は独断という外ない。便所に行くのに連れが要る要らぬは別として、ふるさとの便所の状況として、この句「ふるさと」以下はふるさとの便所の説明に過ぎない。ふるさとの便所の状況にしても、ふるさとが必ずしも田舎の人里離れた地域と限らない。要するにこの句、傷だらけで不完全である。

薰風子大阪の都心から郊外電車で十分走れば、今だに便所は別棟で荒壁だけという村落がある。

だから人里離れた地域に限ったことではないが、ともかく作者珠美氏の詠んだふるさは、夜の便所へ連れの要るようなそういうたたずまいであったのだ。だから評者は作者の立場に没入して味わわねば当を得ないことになる。

句の良否を云々することは評者の立場観点からのことで、如何なる悪評として作者に解することはないが、作者が作句した立場と同じ立場になり切る努力をしないでする批評は非礼である。句は発見も浅いし、表限も新味がなく、唯、よく判るという程の句だ。

没食子——おとも臭い評になって申訳けない。私は大阪の旧市に生れ、小学校の頃一つ隣の町に転居したが、どちらも住居と便所とは離れている家だったので、その頃の悪い気持ちの悪い、印象が今もって植付けられて、夢に見たりすることもあつた。おとした経験がこの句を面白く味わさせてもらった。ただそれだけのことである。だが私は実感句としてこの句に共鳴出来る。

孫の目へおそるおそるの屋の酒 木象

紫香——おじいちゃんはお酒のみ、だと孫に思われたいくないという事を現した句と思いますが、多少のこっけいさはあつても、も一

つピンと来ないうらみはありますね。

文庫——当然酒を飲む必要のある場合、それが真つ昼間だって何もやましいところは無い。むしろ孫を膝下に引き寄せて、ご馳走を箸で摘んでやる筈である。併しこの句の場合はおじいさんは七十過ぎ、お父さんは四十、孫は十才位か、とに角権力なきおじいさんで昼間酒をのむことは憚る身分である。孫が父に或はお婆さんに告げ口する恐れがあるのだ。いわばこの場合は盗み酒酌的なものと解して面白く感じるし、句として一応出ていると思う。

薰風子——「おそるおそるの」の「の」がとつてつけになってしまっている。瘤のような「の」だ。老人の日常吟で、心理描写も目新しくない。

没食子——酒豪、そんなのではないが酒好き。僕は休日には朝から盗み酒を大びらでやるのが殆んどである。幸か不幸か停退の今も孫がないので「おそるおそる」の味がわからない。でもこの句「おそるおそる」と畳んだ所に味があるのではないか。孫の告げ口を気にするようでは、ゆつくり昼の酒にも楽しめなからうし、孫の教育上云々と来ては昼の酒は論外である。しかしおそるおそる呑む所に

この老人は酒の味を楽しんでいるのかも知れない。ただそれだけ。

紫香——この「おそるおそる」は軽い意味の心配で一寸したユーモアを感じただけの句ではないでしょうか。

文庫——経験は無いが川柳として秀作と信ず。この句「おそるおそるの」の「の」は動作を強めるものでこの場合特に重要にて、この句を支えている。

薰風子——文庫氏の「句として一応出来ていると思う」という言葉は、今回の句評リレーの句、五句ながらにいえることだろう。五句に甲乙もつけ難い程で、先刻「評のし難い句ばかりが当るように感じられる」といったのも、「一応は出来ている句が多いからだろう。この句、再び鑑賞しているうちに「孫の目へ」のへも

気になって来た。をの」の方の孫の目の凝集力が強く感じられはしないか。作者の卑下反撥の心情が強く出ている。「寝るため

の酒を娘の眼よ妻の眼よ「一瓢」を思い出した。

没食子——やはりこの句は「おそるおそるの」といった所に焦点があり、この「の」は文庫氏のいわれるように動作を強めているようである。また薰風子氏のいわれるように、とつてつけたようでもあるが、この場合とつてつけたにしてもある方がよいようだ。それから薰風子氏は瘤のようだといわれている。さればいっそのことこの「の」をとればどうなるか。句意を強めると思うが如何「孫の目へ」の「へ」は成る程「を」としても良いが幾分説明感が出るように思うので、原句のままの方が私は良いと思う。

食慾のあいの手に出すコンバクト どんたく

和館 大華文

日本建築の特色に
近代美をいかした
建物で絵画・彫工
書蹟・陶磁・漆工
染織など国宝や重
要文化財をふくむ
逸品を集めたすば
らしい美術館です
春秋には特別展観
も開催 (月曜休館)
近鉄学園前駅下車すぐ

紫香―食欲と女、ありふれた題材ですが、「あいの手」という所に面白さを作者は見つけられたと思います、も一つ力が足りない様です。

文庫―中々面白い見つけどころと思う食べながら面白い面白いに化粧くずれを気にする女ころを巧みにとらえている。併しこの場合「出す」というより陳腐だが「のよう」か「出る」として見度い。

薫風子―食欲とは莫然としている。ここは定食とか懐石とかであろう。併し、強い抽象的な語にした作者の意図も読めるような気がする。「あいの手に出す」を洒落た表現だと受取れない。本当の遊びのころ、洒脱には違ひ、うわすった技巧に溺れ心が留守だ。「合の手」という言葉の思いつき川柳というほかない。どんなく氏とは、句評座談会で同席し、知己だし、句も常々注目しているのだが、この句を組上にされたのでは不服であろう。

没食子―食欲と抽象的な字句が先ず句勢を弱めている。だといって外に適當な句語の見付からない今、これでもいいかも知れないが、句材は紫香氏のいわれる通りありふれている。コンパクトそのものが詠み陳腐されているので損な句といえよう。それだけに他の字句に余程腐心せねば佳句は生れない。だがこの句は中七で一応まと

まっていると思う。食堂やパティ―等で、平然と人前で箸を置いてはコンパクト、フォークを置いてはコンパクトとお化粧を直している姿を見る。その心理は女性でないと判らない。ところで合の手であるが芸能、技芸に関連性をもたせて、上手に合間を修辭し表現したのは効果的であったと思う。要するにこの句は合の手で生きて来た句といえるだろう。

紫香―食欲とコンパクト、これらは普通の女を表現する上の一つの道具でもあります。「あいの手」でリズムに乗った形で健康な女性の仕草が出て来たのではないでしようか。

文庫―この句食欲として何やら分らない莫然としたところが、面白いのである。句材は誰も気のつくところだが、この食欲で句が生きている。

薫風子―食欲という抽象的な言葉を使った意図も読めぬではないといったのは、こういう鑑賞からなのである。ランチとか、デイナーとかの或る一つの食事の間に出すコンパクトではなく、女性と食欲という普遍的な取り合わせの、その食欲、その合間にはたコンパクト。つまりは「女とは食欲の合の手」には化粧だ」ということをいおうとしたのではなからうかと。併しこの鑑賞は一応考慮したものの正しいものとは思えず、他の評者諸氏と同じ観方に落着い

た訳であるが、食欲という言葉は不消化。

没食子―文庫氏もいわれている「あいの手に出す」の出すが再読して一寸気がかりになって来た。文庫氏説の陳腐い表現の方が良いかも知れん。それは私が思うだけのこと。三氏の句評それぞれ要点に触れていて結構だと思う。

雌 々
臘夜と云うに救急車が走り

紫香―多少感傷めいた句。臘夜で自然の静かさを感じ、救急車で浮世のあわただしさを対照にされたものと思うが、臘夜と救急車の取り合せにまだ無理があるのではないでしようか。

文庫―「おぼろ月夜と救急車」紫香氏説の如く無理がある。作者はそうしたことを目撃したのかも知れないが、これでは単に報告に過ぎず川柳といひ難い。

薫風子―都心では臘夜の実感が稀薄だが、大阪では桜の名所の一つに造幣局の通り抜けがあり、ボンボリに灯の入った夜桜を眺めたりする時には、流石、臘夜だなあと嘆息するのである。そんな時にも救急車のサイレン。これはとってつけではない。事実都会では、昨日も今日も、昼も夜もの出来ごとだから。臘夜の感傷にひたっていたら、「何事ぞ、かかる臘の夜に」の感を深くすることだろう。救急車を活写するには、「臘夜を

割って救急車が走り」などともいえそうだが、「いうに」には批判の意味合いが潜んでいて、これにはこれの味があつて良い。一句を成している。

酒

清



灘・魚崎

金露酒造合名会社釀

没食子―静なる臘夜に動なる救急車の取合せ突飛といえは突飛である。でも都会ではこうしたことに合すことも有り得る。俳題であり句語でもある臘夜が味うものに感傷感を抱かせるも宿命といえよう。近頃の救急車も惰眠をむさぼっていられない忙しさだろう。

この句の「いう」には、臘夜と救急車との対照の妙を深めるための連繫詞であつて、ここでは一応のヒット性を認められる。面白い漫画が出来そうな句だ。

紫香―たしかに「いうに」は没食子氏のいわれる通りこの句を生

かしていることばであります。ただ近頃の都会では年中救急車が走っているのだから無関心になつていのではないでしようか。

文庫―これが川柳として大手をふって歩けるなら凡そ川柳なんて甘いものである。

薫風子―ちよびり社会諷刺の味が出ているのでやや救われた句だ。「救急車うちの子供はうちにいる 鞍馬」という佳句がある。

人情が活写されている、同じ救急車に対して、片方は季節を、片方は親情愛を配して句に仕立てられた。この場合、勿論表現力の差は大いにあつてはいいようが、それにしても人情味の深い人間諷刺は強味だなおと痛感させられた。

没食子―私は前説の如く静と動の取合せを頂きたい。確に救急車も多忙ではある。都会人には紫香氏説の如く、またか位にしか思っていないかも知れない。しかしそれを見逃さず臘夜と抱合せて作句した詩心をかいた。私は自然観対照川柳の部に這入る句と思う。いづれにしてもこの句は表現が消化不良だ。何かの足りなさが後に残る。

◇ 正 誤

九月号(句評リレー)三三頁三段目、七行目の「くたぶれた顔していても女将なり」の句主、春葉とあるは、いむをの誤りに付訂正



白子屋お熊

富士野鞍馬

いたずらな娘八百屋と材木屋
(タル一六七)

この八百屋はお七で、材木屋は白子屋おくまである。また、

名の高い材木屋紀文とおくま

(タル三〇)

と紀文大尽とも並べられていて、

この材木屋白子屋は享保の頃、新材木町二丁目河岸通新道角に在って、主人は庄三郎といいお人よしで、妻のお常は淫奔派手な女であった。ために家運が衰えたので、五百両の持参金の智又四郎を娘お熊に迎えた。その又四郎は醜い小男で真面目であるのに反し、お熊は美人であり、母娘とも派手好みであったからうまくいかなかった。

お熊が親父はら帯をせず生れ

(タル二一)

材木屋もお袋の不埒から

(万明三)

と、父のお人よしと母の淫奔を詠んである。

夕葉師などとお熊は塗って出る

(拾九)

又四郎を嫌ったお熊は、よくある筋の、手代忠七と密通したのである。そうすると、又四郎が邪魔になるので、母娘相談の上離縁しようとしたが

持参金を返さねばならないので、下女のきくに言いふくめて、智又四郎の寝所へ忍びこませ、剃刀で疵を負わせて

心中と見せかけ、その理由で離縁しようとした。ところが、おきくは又四郎に組伏せられ、仔細を白状したので、早速又四郎は訴え出た。

そこで、大岡越前守のお裁きとなり、享保十二年(一七三七)十二月七日、おくまは手代忠七と共に引廻しの上浅草獄門に処せられたのである。時におくまは二十三才であった。同時に十八才の下女

きくは死罪、母お常は遠島、父庄三郎は江戸追放と、それぞれ処刑された。

お熊は引廻しの時、上着は黄八丈の大格子縞、下着は浅黄と鼠で、唐草模様の板縮大形の帯を下げ、髪は島田に結い、薄化粧して、襟に水晶の念珠を掛け、役馬に跨がってうなだれた姿は、見物人の評判であったので、川柳も、材木が八丈を着て名を残し

軽くいつても八丈がものはあり

(万安四)

と詠んでいる。「八丈」は遠島に洒落である。

それ以来黄八丈は、罪人の着たものであるというところから、当分着る者がなかった。それで、

黄八丈着殺しにした惜しい事

(万安五)

反物をお熊一色けちをつけ

(タル一三)

お熊以後とび八丈が売れ出し

(傍四)

お熊にもやらせまいしと嫁は干し

(万安九)

と詠まれ、土用干にも話題になった。

其当座質にも付けぬ黄八丈

(万明三)

江戸中の質に流れる黄八丈

(リ安八)

と質屋でも黄八丈はとらなかつただろうと想像されている

これが評判になって、安永四年(一七七五)には、「恋

娘昔八丈」という新作浄るりが出来、それにはおくまが白

木屋お駒、その情人を髪結才三郎となつて、芝居に演じられた。

おとっさん日髪にしなとお駒いひ

(タル一六六)

と川柳にも詠まれていた。

また黄八丈を嫌った反対に「お駒染」とか「お駒飽」とかが流行したと「平日閑話」に見える。

この白子屋の屋敷跡に、伊勢屋七郎兵衛という人が「和国餅」という餅を売っていて有名であった。それをまた川柳は、

大胆な娘のあとへ餅屋越し

(拾五、傍三)

しろこ屋のあと餅屋とは思ひ付き

(タル一三)

八丈が跡で日本の餅を売り

(當初)

たしかお熊はここらだと餅を喰い

(タル一三)

とお詠んでいる。

なおその頃の落首に、しろこやを下から読めばおやころし 智を殺さんたくみなりける

というのがあったという。

「新聞少年の日」

不死鳥

に懷う

不 死 鳥

十月二十日は「新聞少年の日」で夕刊が来ない。夕刊が来ないのは淋しいが、新聞配達の労苦を思うと辛抱出来ないことではない。「新聞少年の日」は今回で二回目だが、なっとくのいく休刊日だ。私のうちの「毎日」は少年が配達しているらしいが、メッタにその姿を見かけたことはない。郵便受へ落ちる音を聞くばかりである。「朝日」は老人が配達していたが、いつのほどにか痛々しい姿を見せなくなった。亡くなったという噂を聞いたが老人にとつては少しく過激な労働のようであった。配達が少し遅れても、いそがせる気にはなれなかった。老人で新聞配達をするのには事情のあったことであろう。



義談口窓

句集は作家の魂の顯現

あそ お じ ろう
麻 生 路 郎

集らしい句集が出るようになったが、それすら内容や外装の点に於て、まだまだレベルを高める必要がありはしないか。折角苦心の句集でありながら、内容にマッチしない装幀や製本では手に取る気がしないからである。相当に金をかけていながら、製本が針金綴じだったりするとガッカリする。はじめて句集を出す作家に、装幀や製本や紙質のことまでいうのはムリかも知れないが、金をかけない句集でも、それはそれらしい心づかいをすれば、本らしいものが出来るものである。頁数さえ多ければという考え方は間違った考え方であることをいい添えておく必要がある。

もっとも、句集は内容が第一であることはいまでもない。自分の魂の顯現であるからである。句集は現存する人たちだけでなく、未来の人たちとの交流を意味するのであるから、安易な刊行は絶対に排除すべきである。

私は或る俳人の句碑建設の祝賀に招かれて祝辞を述べた際、句碑というものは、黙って一所に突立っていて、世間の人をひきつけて、魂の交流を図るものだといひ、句碑というものの凡その寿命について語った。次にこの俳人の句集の刊行祝賀に臨んでは、前述のように句碑は一所に突立て、自分に近づいて来る人だけに魂の交流をはかるのであるから、やや消極的でしかも静かなものである。ところが句集は一所に定住していない。一冊毎に散兵の形をとり、現存する人たちはいまでもなく、遠き未来の人たちとも魂の交流を図ろうとする点、全く積極的で、これは句碑に比して動的であり、しかも寿命の点についても、句碑にまさるものでありと説いて、その二つながらを合せ持つこの俳人の幸福さを祝福しておいたが、これは、必ずしも俳人の句碑や句集に限ったことではなく、川柳人にとっても同様なことはいえると思う。殊にその句集はA五版で二四三頁で実に清楚な感じを与えられ一社の主幹の貴族を多分に示した句集だったことである。

私は大阪市立中央図書館内に短詩文学文庫を創って、短詩文学（詩・短歌・俳句・川柳）に関する書籍ならびに、それに準ずる書籍の蒐集に努めているが、川柳書の発行が短歌や俳句に比して遙かに少ないことを、はなはだ遺憾に思う。これは川柳が歴史的に短い点にもよるのであるから、ここ五年や十年で追いつくことは至難ではあるが、川柳たるものは大いに発奮して、川柳の研究にあらんと限りの力を盡き、良い柳書をドシドシ刊行されたいものである。川柳の句集はこれまでに、相当出ているが、目ぼしいものは数に於て少ないといわねばならない。昨年から本年にかけて、だいが句

集は従来、自分で出すものではないということであった。それには理由のないことでもないが、その後、皆からすすめられるので、還暦とか、古稀とか、停退とか、その人の半生を記念すべき日に、刊行するという傾向に移って来たようである。ところが、今では句集というものは、そうした記念像でなく、むしろ自分の足跡を振り返えり、更に第二、第三の句集の刊行によって自己の句境の完成を図かる傾向がきざしかけているようである。この傾向は欣ぶべき傾向であると思う。

前にあげた俳人も、自分では句集を出さないつもりであったそうだが、私も自分の手では句集を出さないつもりでいた。出すだけの価値があれば後人が出して呉れる

題吟作家と

雑吟作家

直原七面山

作家の中には、課題を誠に上手にこなす人と、雑吟の方に特異な才能を発揮する二通りの人達がある。

そして、そのいずれをも兼ね備えている作家もあるにはあるが、それは至って数が少ない。

そこでこれら作家の違いについて多少の意見を申し述べてみたいと思う。

さて、雑吟作家について言えば、彼等は至って創造性、獨創性に富んでおり、言わば優秀な「作曲家」であり、小説家であり劇作家である。

ところが、題吟作家は、前者に比してやや獨創性に欠け、所謂「編曲者」であって、脚色家であり演出家であると言える。

そして、ものを集めて来て、一つのを組立て仕上げる技術にかけては、前者の遠く及ばざるところである。

そして、前者は清濁合せ呑む氣がいに欠け、至極理論家で、非妥協的で、しかも性格的にはあのカミ

ソリのような鋭さを持っている。その点後者は、どちらかと言えば平和を愛し、田舎中義者であって争うことを好まず、至って妥協性に富みものごとに協調的であって、人物が丸く快活である。

また前者は、巧まれた人工の美を拒否して自然美を愛し、自由奔放で、定められた歩道の上を歩む事を好まず、野人性で、しかも獨立心に富み、時にはまた孤獨を愛し、大空の彼方に理想像を描いてこれに向って猪突邁進し、ユートピアを実現しようと努力するのに對して、後者の方は、狭く限られた世界に安住する順応性を多分に持ち、決して大言壮語などすることなく、真面目で人の世話なども良く焼き、電車のように、定められたレールの上を走りつづけることを少しも意に介せず、むしろ喜んでこの道を歩み、組織の中をも上手に泳ぎ廻り、与えられた一枚のカンパスの中に、自己の精魂をつくして名画を描き上げてゆく技に秀れている。

さて、以上大ざっぱに両者の差異について述べたのであるが、果して適中しているであろうか。

考えてみればこの両者の違いは、各自が生れながらに持っている人間の本性に基因するものであって、おいそらと、途中で変

であろうと消極的の考えだつたが、矢張り周囲の人たちの希望によって刊行してもらつた。さて出て見ると、自分のこれまでの句境の全貌がある程度判るような気持ちで、実に嬉しいものである。その句集を乗り越えて、更に前進してやろうというはげみになつて、よくも出してもらったものだ。と今更のように感謝している次第である。

ところが、私の門下の若い川柳人が別に何々記念というのでなく、自己の作品を世に問うために勇敢にも句集に踏み切つた。そしてハツラツたる作品が好評を博し、我々の刊行した柳書中で、一年間の売上率ではトップを切つたのであつた。この青年は、既に第二句集刊行に向つて前進を開始しているのであるが、彼曰く、「私の母は私の第二句集刊行の一助にと、毎月五千円宛貯金をはじめました。素派らしい句がたまるまでに、刊行費の方が先に行くのではないかと心配しています」というのである。私は思わず熱い涙がまぶたを濡らした。この母の愛情、その子の幸福、川柳人は多いが、そうした親子なんて、そうザラにあるものではなからう。句を作ること、句会へ行くことさえも、親が反対したり、妻が不満だったりする話はチョイチョイ聞か、この青年のような話は、永い川柳生活をしてる私にとつても、はじめてのことである。

句集を何等かの記念に刊行する

時代はもう過ぎたようだ。私は必ずしも記念出版を否定しているのではないが、句集はその人の環境によつて、経済力のゆるす範囲に於て、自由に刊行するのがよいのではないかと思う。

私の句集「旅人」は昭和二十八年に刊行されたものであるが、とうの昔に無くなつてしまつた。今でも欲しい人が多いからもう少し余分に刷っておけばよかったと思う。限定版で五〇〇部刷つて一部の定価が八〇〇円だつた。その当時としては句集では最高の値段だつたので、一部の人は高の普及版を出して欲しいという要望もあつたが、それは果たせないまま今日になつてゐる。句集などは、いつの間にかやう無くなるものだから、少しぐらゐ余分に刷ることをすすめた。

それから、最後にいいたいことがある。それは句集を読めば、句のいい悪いは別として、その人が浮彫りされているような句集であつて欲しいと思う。その人の思想は元より、環境までがハッキリと句を通して判ると、作者に親しく会つてゐるやうな気になれて、時が経つても、開いたところから拾い読みして、その人の句境に浸られる喜びがあるものである。一番いけないのは、所謂川柳らしい川柳の羅列で、その人の句いもしなければ味もないという句集である。そんな句集を出すのも、作家の自由ではあるが、そんな句集を読まされると、青竜刀氏のいい草で

はないが紙とインクのムダづかいがアタマに來るものである。こんな作家は金があるから出すのであらうが、出すまでに、一応先輩に相談をして出しても遅くはないと思う。

しかし、今の私は句集に限らず、少しでもない柳書が、もつとつと沢山刊行されんことを望んでゐる。それは古句に関する解説書でも研究書でもいいし、川柳隨筆といった種類でもいい。古川柳の解説書にしても、従来刊行されてゐるような、単に句の考証だけで終つてゐるのでは、私達作家にとつては役立つ範囲がまことに狭いといわねばならない。

私達作家が、古川柳書の「柳樽」や「武玉川」などから詩的な句を拾ひ蒐めて、詩情の再生を謀る書を刊行するのも意義あることだと思ふ。そんなことを昔、森東魚に談じたところ「そりや、いいよ君、さし詰世話人は君だな。夜叉郎や花菱などを引張り込んで輪講をやつたらどうだい」といつて呉れたが、作家で雑誌を持つてゐる僕の忙しさでは具体化させるだけの余裕がなかった。しかし、その精神は今も失つてはいないで、機会があれば、そういった方面の本も書きたいと思つてゐる。夜叉郎死に、花菱逝き、東魚が亡くなった今日では、これも過去の語り草に過ぎないこととなつた。秋の夜の不朽洞で、川柳の未来像を語れば時の経つのも知らないのである。

することは至つて困難のようである。

従つて題吟作家が、もし将来川柳史にでも残るような「名句」をものにしようとするれば、余程努力しないことには、その目的を達成することは至難な業と言うべきであるし、また一方、雑吟作家においても、毎月の例会や方々の大会とうに出席して、群をぬいた好成績をおさめ、他の柳人達からもてはやされたり、尊敬の念をもつて

不朽洞

★常任理事会

十月二十九日午後七時

会から

南詰の中島小児科診療院階上で、常任理事

★新会員紹介

十月

松田半月（大阪府）正

摩太郎氏推薦

十一月

越智一水（今治市）正

曉童・旭童氏推薦

すばらしい 着心地

蝶 矢 シーツ



迎えられようとするれば、これまた難事の中の難と申すも過言ではありますまい。

が、いずれにもせよ、自分が果して題吟作家であるのかそれともまた、雑吟作家であるのかを知つておくことは、各自の今後の川柳活動の上に影響するところが甚だ大であるので、出来るだけ早い機会に、自己が一つの作家群のいづれに属しているのかを、見極めておく必要があらうかと思ふ。

生路郎先生、松江梅里、川村好郎、傍島静馬、戸田古方、小川恒明の諸氏と若本多久志。

主催・関西短詩文学連盟 後援・大阪市教育局

第六回 短詩文学作品展



作品展に足を吐く各部門の大家作品

年毎に作品が向上する川柳部門

大阪市文化祭行事の尖端を切った第六回短詩文学作品展が九月三十日(月)から十月五日(土)までの六日間、新装の毎日ギャラリー(大阪毎日会館地階)ではなはなく開催された。会場正面には、主催の関西短詩文学連盟の理事長、麻生路郎先生の壁掛、中島生々庵先生の軸、短歌の安田青風先生(常任理事)の軸、俳句の神田南畝(常任理事)・湯室月村・六車井耳・永尾大露諸大家の作品が、整然と納爛を競っている。安田青風先生

の知的抒情「茫々とながき過去あり紺碧の空にしら梅が貼りつけられて」の作品、永尾大露氏の豊太閤偉業のひとつである大阪城の石垣と、芭蕉翁の遺跡洛北金福寺等の作品が目をついた。以下逐一わが川柳諸家の出品作品を紹介することにする。

路郎先生の壁掛「旅二題」はゾリンの和紙に、昨夏の旅行吟「十和田湖よみな酒になれ旅人へ」の句と、「だしぬけに鐘の鳴るのも旅のこと」が揮毫されている。筆勢漲る力強さは青年の感がある。他に色紙二点「よしや道は遠くとも二人」「断なくて政治もなしと思いいる」。渡乃先生は短冊二点、「松虫はこれか淋しや昼の籠」「一日の惜しさピリオド打って寝る」。渡乃先生は仲々お書きにならぬのでフタをあけるとすぐに赤札が貼られた。生々庵医博は細軸五

点、「育児書の通りに弱い子に仕上げ」「おきこたつ湯豆腐たぎるいいくらし」「日に疎くなれそうもなく母こいし」など先生の生活環境がそのままというものばかりである。中島小石さんが短冊三

点、「足蹟をたたえわらぶきのこされる」など簡単な画が興をそそる。以上は先ず夫唱婦随のお二組なのである。

西屋栞氏の絵ころには感じ入った。鯛の浜焼・黄鰯山の魚板・奈良の鹿の三点、それぞれの句とともに面白い味が出ていて、俳画の先生も賞讃しておられた。松江梅里氏は色紙四点短冊五点、「積善の家に天与の花が咲き」の句は通りすがりの人が、知人の結婚祝に求められた。のし紙も頼みますに関係者は大慌てをしたが、梅里氏はこういうところにも商売というを心得ておられる。若本多久志氏の「風雪に耐えてそろそろ禿げてくる」「倅を信じて茲に女生き」は恒例の作品展に欠かせぬ恒例の作品のように印象付けられてしまった。北川春泉氏は短冊三点、「本説まな思うてる間に秋が過ぎ」「ヘエこれが胃袋ですかレントゲン」医博らしい句が揃った。戸田古方氏は短冊五点、マツチの軸で書かれた作品、スケッチが入って

いて味を深めている。女学校の先生らしく「春愁というオセンチをうれしがり」の句に添えた女学生の絵が一番良かった。後藤梅志氏の短冊の「張り板のようにくさらぬ板もあり」「眼鏡なしでも顔色のわかる母」の句も字も氏の個性がにじみ出ている。菊沢小松園氏は短冊三點、「酔うて弾く三味とは見えぬ撥さばき」「帯とけば帯も呪いの蛇に似る」など万年青年といわれる氏には女の句がふさわしい。八木摩太郎氏の色紙短冊の句は「数学に父の威厳はなかりけり」「棧橋で紙一筋の義理が済み」「横坐りうれしみのものが縫上り」など、本社会や大阪市民川柳大会等の天位の句を揃えてお

らぬ。山川阿茶さんの字は美しく品位がある。「男みな阿呆に見えて売れ残り」の句はご自身を詠った句で有名だが、「古稀近くなつても真紅のバラが好き」の句も果たしてそうなのかなと、女史の年

コートの味

モダン 川柳

心 斎 橋 大 丸 北 の 辻 東 へ

御 門

TEL(271)6684

御集会には階上御利用下さい



齢にやきもきする男性が可成りあった。河村瑞川氏の色紙「のみたくてただのみたくて働いた」の句は展覧会を見に来たサラリーマン諸氏に持てた。「おい、名句があるぞ」と肩を叩き合っていたサラリーマン氏等はこの句にほだされ、帰路ビヤホールに直行したことに受け合っている。

「元日の駅前広場広場となる」「網刺する余生を埋すめゆくような」などの句を出品した。今年は阪神百貨店二階の丸善画廊から毎日ギヤラリーへ会場を移し、北大阪のサラリーマン階級の短詩文学愛好者にひろく鑑賞をして戴いた訳

で大いに意義のあったことと思ふ。今年出品された作家は勿論のこと、新たに連盟に入会の作家も、今から作品展を心づもりにして、来秋、一層充実したものにして戴きたく念願して筆を置く。

(橘高薫風子記)

「リカ子旅時雨を持って来たような」一連の句は女性に好評であった。橘高薫風子は短冊五



短歌部門の一部と俳句部門の一部



川柳部門の右端と角柱の周囲

続

川柳書架

(32)

黒い日輪

(井上清珠句集)

★本書の巻頭には根元紋太氏の序がある。その一節に「清珠君は、中々複雑で、深く、巾の広い句境

の持主である。派手かと思えば地味、青年のようで老成、病弱のくせに健康である。一人で何役も勤める。センチメンタリストで、ロマンチストでユーモリストで、時々アウト・ロウの面も発揮する。

句集 かささぎ

(梶川蘇堂著)

それだけに考えながら楽しめる作品である。
★自序の一節を抜くと「元来私は陽気で朗らかな性質ですが、この十年間の句を積み重ねて感ずるものは、やはり病作家の瞳の範囲から抜け出せていないようです」と。
★目次一挙楽の譬に・十円の花火・銀箔・両の手の林檎・あとがき。
★昭和三十三年二月十六日発行B6版四一頁、価額一〇〇円。発行所大阪府泉南郡泉南町信達牧野大阪厚生園せかんど川柳会。
★著者は図案家だったが、不幸にも句集を見ずに昭和三十三年十二月十一日に夭折した。

★巻頭に根元紋太氏の序がある。
★目次一終戦前・自炊百日から・時代懐古句帖から・敗戦の春・二、一ストの頃・老酒も尽き・口笛のボタ山・ガム好き・廻り椅子・五十・人間に懲あり・後記。
★本書には発行年月日もなければ発行人の署名も定価も書かれていない。著者の後記に昭和三十四年十月と記されているのでその頃に出されたものであろう。B6版八八頁。現住所は西宮市。
★著者は鉄道人で句歴は現在では三十年位になろう。

ひと

(田中美喜子編著)

★目次を挙げると、

柳話「蟹」(熊大名教授田中辰二)・笑いの認識と味わい(田中美喜子)。選句一第一部地味な色、第二部ふだん着、第三部今日の真実。鳴風川柳への歩み、(編者)あとがき。
★昭和三十四年十二月二十八日発行。B6版一六四頁。非売品。発行所熊本市池田町碑田、川柳研究会。
★編著者は田中辰二(鳴風)氏夫人。

句集 かたつむり

(富士紡川柳会)

★巻頭に前田伍健、高橋紋々、小糸康夫、伊藤凡々氏等の序がある。
★本書は職域の川柳句集である。
★昭和三十四年十月二十五日発行。B6版横綴、一四五頁。非売品。愛媛県周桑郡生川町富士紡内 富士紡川柳会編集。

営業所
阿倍野店
堺吉店
住野店
平島店
都島店
蒲生店
十三店
九条店

credit system



丸越

良いよい月賦百貨店
良い安い



高野山川柳考

(下)

本多柳志

(四) 高野の杉

弘仁七年空海が初めて入山した頃の高野山は、多くの沼沢湿原を囲んで濃葉樹の密林におおわれていたものであります。大師入山後の堂塔伽藍の建立や又最近に至るまでの頗しい土木工事に依って、林相や地形に大きな変化を来した事が想像されるのであります。今尚老杉巨木枝を交え、千年の緑全山をおおうて美しく、真に天下の霊場としての風格を保ち、年々六十萬の僧や観光客を集めてゐるものは「徳を磨く事木を育てる如くせよ」と教えた大師の余徳を奉じて、凡そ営利の爲には一本をも伐る事をしなかつた、後世万代の森林保護政策があるように思われるのであります。当時既にこの杉を利用して箸や杓子を作る事を教えた、大師相伝の民生事業が、近年になって頗る盛になつたとの事であります。

がスキャキだそうであります。外人観光客が夫々の本国に帰つて、スキャキを樂しむ時になつてならないものは、何といつてもこの日本製の杉ワリバシだそうであります。割箸の輸出が近年俄に倍増したとの事であります。遠く空海の昔から、高野山箸と杓子でめしを喰ひ、

(五) 高野の植物

樹木の密生する所当然考えられるのは、草花やシダ類の繁茂と小鳥や昆虫類の棲息であります。植物の中高野六木と昔からいわれるものに、マツ、スギ、ヒノキ、モミ、ツガ、コウヤマキがあります。が、この山独特のものは何といつてもコウヤマキではないでしょうか。光沢のよい葉と円錐形の樹容とは、群樹の中に異彩を放ち見るからに高野山カラーを感じるのであります。大体マキは本邦太平洋岸の山地には、至る所に分布して

いるのであります。高野山のような多量の純群落は他にその比を見ず、植物学上最高の宝庫とされてゐるのだそうであります。その葉は長もちがするので仏花や墓花として、珍重され山内至る所で売られております。

値切る氣のマキの切口がさがれる

結果になり、ほられたマキの枝を信心の自慢でかつくコウヤマキ

という事になる訳であります。被子植物としての草花も山内に多く産し、千数百種といわれております。中でも珍らしいものとしては、フタリシズカ、カリソソク、ヤマシヤクヤク、ツクシシヤクナ、ミヤマエンレイソウ等でありまして、澄み切った高山の空氣の中に可憐な花を

霜が来るまでの命を咲きはこり

登山者の目をたのしませて呉れていました。又クラガリシダ、カラクサシダ、コケシノブ、ミヤマワラ

ビ等の珍らしいシダ類も多く見る事が出来るという事であります。

九百米の高地の自然林に包まれている高野山は、富士山麓と共に有名な鳥類の繁殖地でありまして、百種類にも近い小鳥が老杉古木の枝に飛び交ひ、寺院の庭や堂塔の間に啼き歌う姿は正に樂園であり、涼しい夏の高野山は小鳥たちにとっては、この世乍らの極楽浄土ではないでしょうか。珍らしいものに、おおるり、かわせみ、こげら、ぶつぼうそうちよう等がおりまして私も、登山の記念に是非ぶつぼうそうの、生の声を聞いて見たいものと、宿坊の裏庭の木立の下に、小一時間も立ちつづけましたが、

仏法僧待てば涼しい十七度の山の冷氣に身内が寒くなった丈で、

縁のない衆生か仏法僧泣かず

あきらめて、宿坊の蒲団にもぐりこみました。

(六) 大門

九度山―神谷宿を経て極楽橋からは、四十八曲りといわれた、不動坂を―丁毎に立っていた卒塔婆に導かれて、途中鏡石、四寸岩などの大師ゆかりの旧跡をたどり乍ら、登ったのは昔の夢で、先年道路公園の手によって、

不動坂コマ切れにして道がつき

ました有料道路を大型バスにゆられて来ると、重層の楼門が見えて

来ます。高野一山を代表する総門として名高いこれが大門であります。創建は保延六年といわれていますが、幾度かの雷火に焼かれています。現存のものは宝永六年東山天皇時代の建立だそうであります。桁行十八米、高さ四十一米の大門が空にそびえ立つ偉観は眼に目をそば立たせるものがあります。大門に立って霧に包まれた、重畳たる峰々を眺める時初めて、

大門で高野は高い山と知れるのであります。晴天ならば加太、淡路島まで見えるとの事でありますが、折悪しく、

天気なら見える淡路は霧の底

にかくれて見る由もありませんでした。そこは又、

山門を出でて秋日の谷深しの句碑の立っているところであり

ます。

(七) 石塔原

山に來た誰人も最も高野山カラーに包まれ、又大師のえらさをしみじみと感じさせる所は、この石塔原ではないでしょうか。

一の橋から奥の院への二キロ、石畳の参道をはさんで老杉の間に目白押しに並び立つ、新旧大小様々の石塔の数は、三十万基といわれております。徳川豊臣一門島津淺野毛利等々の大名小名から、

有名無名の庶民町人僧俗の墓が生ける間の権力や階級を超越した、平等無差別の中に世の変遷を外に

花嫁の料理次々ひいてゆき 阿茶
 ライバルの眼は花嫁をそれたがり 同
 婚約が長く花嫁照れもせず 同
 式服はとめ袖にする二度の緑 同
 ふろしきで来た花嫁にある覚悟 きさこ子
 花嫁がずらり神社は秋日和 同
 開拓の花嫁さんヘドラが鳴る 同
 花嫁の写真を載せた尋ね人 同
 母の夢娘の夢今日の晴れ姿 一栄
 胃の荷を下ろして呉れた晴れ姿 同
 花嫁へアマのフラッシュしきりなり 同
 田舎バス花嫁の座をあけて待ち 同
 大安は花嫁ショウウィのようにこみ 同
 花嫁を出して宝をとられた気 同
 姿見へ倅せいつばい見せて嫁き 弥生
 倅せなわが家をあとの嫁ぐ日よ 同
 嫁と姑同じ趣味で丸くいき 同
 花嫁のかづらを脱いだ思づかい 清子
 ウエディングケーキ切る花嫁のふるふる手 同
 花嫁のうれい化粧にも書き 美喜
 花嫁の緊張はぐす祝辞なり 同
 花嫁の出たあとの部屋広々と 同
 ハミリへ先ず晴姿おさめられ 同
 花嫁も一月たてば見かえられ 同
 花嫁の何を思ふか目をふせて カネ女
 花嫁は拝みたをして貰う人 花梢
 花嫁になる娘をつれてふろに行き 寿美司
 うちの娘がこもきれいな嫁御寮 あいき
 花嫁を見送る母の瞳に涙勝子

次回題「赤電話」 〆切十一月末日

安堵し切った姿で立っておりま
 す。石田三成、明智光秀、曾我兄
 弟、武田信玄、上杉謙信と見て参
 りますと、何だか日本歴史の一面
 を集約して見る事の、出来る様な
 所でもあります。

空海加きの一介の僧侶の遠く及
 ばざる、絶体の権力者であった、
 諸大名やクゲに至るまでが先を争
 う如く、豪華を競うが如く高野へ
 高野へと、巨石を運び上げたのは
 一体如何した理由によるのであり
 ましょうか。

石塔は大体徳川時代以降のもの
 が、圧倒的に多く形も一段と大き
 なものになっている事から、打ち
 つづく太平に人心も収まり、殊に
 幕府が諸侯を財力的に弱体化せんと
 した、一つの政略であった事も容
 易にうかがえるのであります。が
 又こうした政策の外に、諸大名や
 権力者達が打ちつづく闘争殺りく
 の為の、多くの犠牲者へのさんげ
 供養といった、菩提心の表れでも
 あったのではないのでしょうか。衆
 生済度の外に何の権力も野心も持
 たなかった空海の姿に、あこがれ
 た人達の間本然の悲願を達成さ
 れた、弘法さんと共に永久に眠れ
 る喜びに、つかれたからではなか
 ったのでしょうか。一切衆生悉有仏
 性、色則是空空則是色を生々と感
 じさせられる、二キロの参道であ
 ります。流れるようなガイドさん
 の声を聞いていて、一般に男性の
 墓は貧弱で小さく、奥方と称する
 女性のそれが大きくて立派な事に
 気づくのであります。在世中の女

人圧制へのコムプレックスとも考
 えられたのであります。が、社長夫
 人の葬式が社長の葬式よりも、盛
 大であるという現代社会風景と、
 思い合せて苦笑させられました。
 父母のしきりに恋し雉の声

芭蕉
 の句碑の立つ所もこのあたりであ
 ります。石塔丈ではなく一般に、
 高野の建物の多くは、母の供養の
 為というのであって、

父の供養と云う石塔は見当
 らず
 がっかりすると共に一寸考えさせ
 られました。石塔原中程の右側に
 明智光秀の墓があります。台石は
 「何度取り換へてもこの通りまっ
 二つに割れるのであります。相恩
 の主君信長を殺した逆臣の墓だか
 ら」というのであります。取り
 換へても取り換へても割れるとい
 うのが、物理的にも科学的にも納
 得出来ないものであります。主君
 を殺した人の墓が割れるというの
 でしたら、凡そ満足なのはなく、
 高野山武將の墓はみんな割
 れ

る筈ではないのでしょうか。
 信長の將兵が高野山を包囲し
 て、あわや叡山の二の舞かと山内
 一同色を失った時に、突如起った
 のが有名な京都本能寺の大変であ
 ったのであります。光秀こそ実
 は高野山を救った大恩人なのであ
 ります。いつまでも光秀一人を逆
 臣扱にして置くのはおかしいとい
 わなければなりません。

承和二年三月六十二才の空海

が、ここに入定して千二百五十
 年、長者の万灯貧者の一灯と共に
 に、真言の法灯絶ゆる事なく引継
 がれた、御本廟も他の堂塔伽藍と
 共に、幾度か兵火や雷火に焼かれ
 たが、昭和四十年の大法要を目ざ
 して、近代的建築に変わりつつあり
 ます。町には今日もダンブカーが
 土煙を上げて走り、ブルトリーザ
 が崖を上げつつ谷を埋め、山の近
 代化へと一日中働きつづけており
 ます。

道路の整備と共に山は加速度的
 に、面目を一新して行く事でしょ
 う。山の近代化も観光高野への飛
 躍も結構ではあります。が、願わく
 ば空海入山の精神と伝統は忘れて
 貰い度くないと思います。仏教が
 昔からもつて来た、はの暗い神秘
 性を打ち払って、けんらんたる仏
 都高野山の発展を祈りながら山を
 下って来ました。

千年の法灯へパスはすい込
 まれ
 Y談もこゝまででした女人
 堂
 大門の小さな人に見上げら
 れ

夏草の中に塔婆は世をのが
 れ
 アルバイトガイドは馴れた
 落語調
 ナショナルの墓地に蛍光灯
 もなし

御本廟やはり長者の光かな
 お経より土産宿坊よく稼ぎ
 宿坊の仏は朝をほっとかれ
 娑婆の風九度山町は三十度

集路一



錦魚

黒川紫香選

童心に帰り錦魚をすくつてい すみれ
次々に死んで錦魚鉢だけ残り 宗義
安物の錦魚ばかりが生き残り 同
ねだられたババが本気で錦魚追い 万竿
自由化の波は錦魚も乗せ外貨 繁太郎
蘭ちゅう風格さすが王者なり 圭井堂
掬はれる錦魚はどれもやせ細り 九呂平
二日酔錦魚の水もかへてやり 光道
飛行機で錦魚も遠い旅に立ち たけお
二学期がはじまり錦魚忘れられ 句菜坊
水垢を食べる錦魚の腹ふくれ 可住
水替へるたびに錦魚の置場変え 勝子
錦魚屋の声団地の昼になり 久美子
錦魚悠々悪童の所有と知らず 野迷路
少年の瞳生き生き錦魚追う 代仕男
二牙郎錦魚の世話もゆきときき 雄々
頼杖の視線に錦魚向きを変え 和三郎

飼われてるけれど錦魚は無表情 千翁
錦魚売り去年と同じ声で呼び 半月
猫の目に錦魚はつんと向きを換え 晃男
老婆のこまめ錦魚の水を変え 初甫
一匹になって錦魚ははつとかれ 李鳥
悪童にいのち任せにしている錦魚 雄声
錦魚鉢恋人同志肩を寄せ 隆子
錦魚すくい今度はババがやつて見る 光郎
錦魚へ留守をまかせて日曜日 杏花
錦魚狙う養母の猫を睨みつけ 八九寸
わが養も時には食べて錦魚生き ろ亭
錦魚売り弱ったのから掬い上げ 専翁
かこわれて鉢の錦魚と身をくらべ どんたく
あきらめたネコは錦魚へ遠くいる 春己
夜店からの貰った錦魚に皆死なれ 黒天子
ウインドの錦魚魔ものよう泳ぎ 静水
降って来た夜店錦魚も負けてやり 隆史
ビニールの袋で錦魚バスに揺れ 大八州
別荘の池に錦魚とおしどりと 雪美
孫が来て錦魚の鉢の位置をかえ 藤波
夏休み済めば錦魚の餌も忘れ 愛鳩
値の高い方から錦魚死んで行き むじな
二た声が風に流れる錦魚売り 天目
錦魚余生の友として飼われ 静波
鉢だけの中で錦魚がよく太り 弘朗
独り者部屋に二匹の錦魚飼ひ 不酔
防犯灯錦魚おち眠むられず 恵二朗
我がものと云うみ錦魚の世話もせず ふじ
錦魚釣りに不運なやつがまた釣られ 旭峯
手水鉢の錦魚ひしやくをうまく逃げ 生薑
錦魚すくい小さなだけならつて来 寿美司
錦魚鉢ここにもボスがしやちこばり 石峰
信仰に生きて錦魚をいじる趣味 抽蘭坊
今年また錦魚を賣うて皆死なせ 萩路

京都

田中烏雀選

錦魚鉢錦魚の糞の長いこと 同
お祭りがすんで錦魚を池に入れ 宗太郎
入れ替えた豪華な鉢で錦魚死に 同
錦魚鉢持つ子の浴衣裾がきき 十九平
出目金が手厚く娘等に葬られ 同
佳句
死にそうな錦魚ばかりをすくいあげ 宗義
一尾になって冬越す錦魚鉢 淀月
生きのびる錦魚そろそろもて余し 圭水
ベッドから見れば錦魚はよく動き 雄々
人
錦魚売り困地で今日は皆さばき 十九平
生き残りの金魚が長い糞をつけ 九呂平
天
錦魚の養女医さんピンセットでねらい 恵二朗
軸
なんとなく留守番錦魚見て過し 紫香

京名所どこも観光バスばかり すみれ
京言葉シンクの強さに絹させる 照子
ハツ橋の土産はすまぬ母入歯 判志
金閣寺撮りつ撮られつ若夫婦 隆史
東山ジャズとマンボで寝てられぬ 千里
だらり帯見る丈でよし京の春 千
住むのなら京都ととかく言うて見る 三五島
連休の京都を逆に帰郷する 抽蘭坊
土産には仏具も添えて京見物 秀峰
旅つかれ京都は名所多すぎる 弘朗
爪弾きに祇園の夜は更けてゆく 旭峯

品質優良

タチカワペン

TACHIKAWA PEN

タチカワペン
タチカワゼム
タチカワ画紙

立川ペン先株式会社

大阪市東区常盤町一丁目十一番地

京都御所納言式部も出られそう 繁太郎
蛇の目傘古き京都を浮彫に 圭水
京へ嫁く姉は苦にする柄のこと 寿美司
詩にもなり絵になる京の夜が沈む 孝風
動く花だらりの帯に寄る雄蝶 専翁
はしご売り頭へ乗せて京の街 杏花
格子戸は明治のままの五条坂 初甫
京都弁にふらふら土産買わされる 保夫
清滝の水はだらりの妓をうつし 雄声
湯豆腐を喰べに京都の東山 李鳥
目に映ゆる祇園祭りの町あかり 半月
まだ布団着て寝てるのか東山 光郎
石畳思ひ出揺れるほんと町 千翁
英語ちとわかるだらりが名ざさる 八九寸
寂光院に杖をひくなり京静か 雄声
本願寺京都に来たと思はせる 天目
京都から始めて使う集印帖 祥月
出張で来れば京都も通過駅 むじな

加茂川の清き流れの京呉服 歌子
古都閑千年之薨不言 野迷路
三日いてまだ見つくせぬ京の寺 桂仙
いもぼうで飲めば折しも鐘の音 どんたき
だらり帯絵ハガキ京都からと知る 黒天
想出の京へ自家用族で来る 春巳
通し矢の語で柱かぞえて見 宗義
カメラアイ大原女馴れた笑みを見せ 生薑
比叡山あこらがうちのギョウとす 可住
上つても下つても寺 京の町
この辺が壬生とわざ／＼廻り道 藤波
お寺より舞妓見せてと云ふ生徒 圭井堂
通過するお東さんへ掌を合せ 万竿
山すそに京の香りがまだのころ 句楽坊
彦九郎歎いて見てるデモの列 十九平
旅行団清水さんで飯にする 久美子
顔見世のまねき京都を冬にする 淀月
団体に驚張りも音をひそめ 勝子
見るだけの祇園女房と宿衣で来 九呂平
その辻をおさがりやすと／＼おんとす 和三郎
京詣り母念願の旅に発ち ろ亭
お上りがいるから京は京らしい 恵二朗
排気ガスじつとこらえて彦九郎 同
京参り小銭は首にかけており 宗太郎
貝割菜明日は祇園の膳に乗る 不酔

西陣の息子洋服生地をやり 愛鳩
豪遊の果ての悔悟は京の鐘 淀月
大原女は恋をしそうにない姿 萩路
おこつてらしい女の京ことば 和三郎
天
加茂川の水の濁りと世の濁り 石峰

紅 一点

河相すゝむ選

新緑へ紅一点の花つつじ 専翁
久し振りに紅一点に句座和む 旭峯
酔う程に紅一点も踊り出し 宗義
背にも眼を意識している紅一点 どんたき
オールドミス紅一点の気焔あげ 春己
紅一点もお茶汲みが嫌になり 圭水
紅一点いつか男性化してしま 照子
紅一点の舌三寸にあやつられ 恵二朗
紅一点女性の票に見はなされ 静水
犯人の中に女も一人居た 秋月
女王蜂めいてキャンプの紅一点 恵三郎
紅一点五黄の寅でたじろがず 雄々
発言を紅一点にしてやられ 弘朗
紅一点は社長の秘書で手が出 勝子
あらくれを紅一点が差図する 圭井堂
紅一点遠慮はしない大ジョッキ 雄々
宴席の隅に明るく紅一点 生薑
紅一点はんに良くなくしやべり 隆子
紅一点やたらに写真写される 素身郎
大峯は紅一点も寄せつけず 半月
紅一点満座の視線意識する 晃男

オフィスの紅一点に虫がつき 李鳥
紅一点たいがい云いたい事を云い 保夫
紅一点意中の人があると云う 初甫
割勘の紅一点はあらずとき 杏花
紅一点男性観を一くさり 雄声
紅一点やばりお茶をつぎ廻り 光郎
紅一点居って講義の耳が外れ 千翁
紅一点そろそろ邪魔な梯子酒 八九寸
紅一点男はあまいものに見え 秀峰
学位授与紅一点と云う理博 圭井堂
オフィスの紅一点とうがたち 愛鳩
美人ではないが紅一点でもて 雄々
紅一点がうちの女房でせいがない 可住
紅一点寝つかれそうもない夜汽車 大八洲
只一人喪服の女美しい 天目
困交に紅一点がいて妥結 万竿
紅一点女は得な生れつき 和三郎
紅一点とかくこの世は住みにく 孝風
紅一点拍手を浴びて少してれ 藤波
紅一点加え楽しい旅にする 代仕男
世話好きが紅一点に気づかれし 九呂平
デモ隊の紅一点がよく目立ち 桂仙
来賓席の紅一点は脂ぎり 光道
紅一点社ではお茶汲む役がつき たけお
お座を持つ紅一点は姥桜 和三郎
紅一点生理現象には困り むじな
陳情団の紅一点に知事も折れ 十九平
紅一点来て良かったとも悪いとも 九呂平
紅一点皆の視線が気にかかり すみれ
紅一点どこに坐ろうかと迷い 秋月
紅一点稀少価値とは知らずもて どんたき
混浴の紅一点は湯気に消え 寿美司
紅一点みんなの恋をはね返し 萩路
紅一点などと女房おだてられ 静水

紅一点少々いける口でよし 恵二朗
紅一点和服が部屋を明るくし 雪美
霧閉気が何時もと違う紅一点 静水
紅一点三等局に花を副え 石峰

佳

二重橋紅一点を中に撮り 淀月
閑散な貴金屬部に紅一点 隆史
紅一点幹事一人がくたびれる 圭水
紅一点ひそかに思う人が出来 愛鳩
紅一点議員バッヂがよく光り 弘朗
紅一点帰る／＼と困らせる 大八洲
紅一点去んで次々用が出来 宗義
幹事会紅一点はお茶を汲み 宗太郎
家庭では紅一点もただの母 藤波
グループの紅一点に賭ける夢 旭峯

人

紅一点ワイダン／＼と聞き流し すみれ

地

クラス会紅一点はいける口 十九平

天

雑壇に女大臣メモをとり 天目

色紙短冊
書画用品

大坂戎ざし
丹月堂
電中セニセニ



入門講座

研究題「音」

清水白柳

音なしの構えで税の納期来
る 野迷路

真実の句というものは人の心を
ひきつける力を持っているもので
ある。この句にはその真実味があ
る。それは音なしの構えと感じた
作者の心のゆとりであると思う。

足音の重さ職安からの父

酔夢

この句には真実味が感じられな
いようである。併し巧みに作られ
た作品としてこうした境地もい
いと思う。表現の巧みさは足音の重
さという三文字にあるといえる。
その重さによって、力なく帰って
くる父の姿をよく描き出されてい
る。

卒業の論文書く夜ベンの音

S

試験場鉛筆だけが音を立て

B

子が受験テレビを小さくし

と思った。

構内に足音残す警備員

R

蛍光灯もうなり宿直只一人

保夫

前の句の着想はよいのだが
足音のひびきに作者が何を感じた
のか判らないのが弱点である。螢
光灯の句は作者の鋭い感覚がその
あるかなしかのうなりを感じてい
るのである。宿直只一人という結
語もその感じを現わすのに成功し
ているのである。

社長出社一瞬音なく静かな
り 滋雀

足音の荒さ秘書をあわてさ
せ Y

前の句の一瞬音なく静かなりの
下五文字は蛇足である。音なくで
静かになったのは現われているの
であるからこの五文字を活かすこ
とを考える必要があると思う。秘
書の句はどこか荒削りな句のよう
に感じられるのは作者が深くもの
を見つめないで上べだけを見てい
るからである。

早起きの鍛冶屋の音で村が
起き 勝子

乳受けの箱の音からきよう
が来る Y

二句共着想が古いといえる。あ
まりにも今迄に詠みつくされた事
柄だが句としてはよく出来ている
だけに取捨に困った。こうした句
が生れるのも進歩して行く過程に
は当然あることなのだから恐れな

いで作句してはしい。

遠近に鐘の音聞ゆ京の宿

K

鶯の擬音が移ぐ知恩院

Y

鴨川に千鳥なかつにジャズ
流れ 句楽坊

前の二句は作者不在の句になっ
ている。ということは事柄だけの
説明で一句を仕立てているからで
ある。鴨川の句にはその点作者が
時代の変遷を悲しんでいる感情を
知ることが出来るようである。

物音へ寝そべる犬の耳の立
ち R

家中の足音を知る犬の耳
S

足音を聞き分け猫が迎えに
出 K

三句とも動物を句材にしている
がどの句の場合も描写が浅いとい
える。第一句はよく詠んであるが
この着想も詠み古された想であ
る。

こっそりとやったに音を立てて
食べ 周甫

不用意にのどがゴクンと音を立
て 生薑

どの句も面白いと思った。たく
まずして笑いを誘ってくれるのが
よかった。

音痴むきの三味もあるなり
老妓かな 静観堂

なにくそと思えば音も出な
い尺八 宗義

鋸の目立か下手なバイオリ
ン 勝子

三味の句にはそこはかとなき作
者の感慨が現わされている。それ
は音痴むきという句語が生きてい
るからである。尺八の句にはユー
モアが感じられてたのしい。句に
真剣さがあるものでそれが尚生かさ
れているのである。バイオリンの
句も面白い。鋸の目立かという比
喩が生きているので成功したとい
える。

ロボットの悲しさねじの音
を立て 柳瓢子

着想の広さを感じさせられた句
である。悲しさという説明語があ
るにも拘らずそれが気にならない
のは句にとけこんでいるからであ
る。

アベックの靴音いつかよく
揃い 万竿

仲々いい句である。素直に詠ま
れているのがよかったと思う。

騒音の都心に遠い老の幸
S

雑音をのがれ命を洗たくす
R

山里の静けさに負けラジオ
かけ 弘村

初めの句は静かな田舎に住める
老年の幸福を詠んだのだが物足り
ない感じがする。それはうわべだ
けの説明句になっているからであ
る。老年の幸を人に感じさせる句
語を考えなければいけないと思

う。次の句の命を洗たくする句はいい句語をつかみ乍ら矢張り感動させるものがない。雑音をのがれという大さっぱないい方にその弱点があるのではないかと思った。後の句は良いと思う。それは静けさに負けたという表現がよかったからである。ただ上五文字の山里がもつと具体的なものであれば尚よかったのではないかと思った。

玄関先夫のお帰り靴の音

細君は夫の単車の音を知り

足音は隣りであつた待ち呆

三年目妻は足音聞き分ける

一、二句とも着想も平凡で、表現にも苦心していないし、ただそれだけのことにしか過ぎない。三の句には待ち呆けという感情があるが隣室なのか隣家なのかによつて句意が大きく変わるのをそれを適確に現わさねばいけないと思う。最後の句の三年目は動くと思う。動くということは一年目であつてもいいし二年目であつてもいい、又それだけが半月目であつても句になるということである。

星明り靴音だけがよくひび

この句は星明りという句語によつて成功しているのである。

丑満時無気味足音振り返り

無気味さを強調するために丑満時と置いたのだらうと思うが、大時代的な語であるためにかえつて失敗したといえるようである。

ジュースもうコップの底をついた音

音たててストローコップの底を吸い

どちらでも平凡さを免れないと思う。

トラックやダンブの音も聞く墓石

山迫り岩間にエンジンこだまして

ダンブの句は都会にある墓地ともとれるし最近ひらけてきた土地の墓地とも考えられるので弱い。

エンジンがこだますかというのもそれだけの描写にしかなっていないと思う。

音もなく来た秋風に気がせかれ

和歌にこうした境地を詠んだのがあるように思ったが思い出せない。

この句の気がせかれというのを布団を縫うのにせかれとかいう風に句全体を考え直してほしいものである。

近代化大工の音まで変つて来

鋸の音で日曜大工とすぐわ

両句とも現代を詠んで成功している。後の句の鋸の音での音という字は省いてもよいと思う。鋸で充分その音は想像出来るから

それを省いて句のリズムを正す方がいい。

音信がないから平和な日が続

近頃は田満らしい音沙汰なく

音という文字は使つてあるが本当の音ではない。私は原則として探らないことにしている。それは米という題で米国を詠んだり、雀という題で麻雀を詠むのは課題から外れるからである。

コトツという音へよろめきひやりとし

人妻のよろめきを詠んだのであれば句意の深さに比して表現が軽い感じがする。それはコトツという音へというところがそう感じさせるようである。いい句語であればもっと深さを持った句になる筈である。

希いこめし手紙ポストに立

希いこめし手紙ポストに立

平凡な句になつてしまつてい

る。希いこめしといういい句語があり年々後がつづかなかつたのが惜しいと思う。

サイレンを何処が火事だと

きく平和

結語に平和と置いたのが成功している句。

汽車の笛時計代りの村平和

遠汽笛下宿におなかすいた

夜

前の句の時計代りはいいい着想だ

と。次の句のおなかすいた夜というのは深いものを現わしていて佳句だと思う。好ましい境地である。

禪定へ線香の灰落ちる音

仲々こうした境地になれるものではない。立派な句であると思う。

音たてて崩れ邪恋のすべが

音たてて崩れ邪恋のすべが

音たててモグリ酸素浮き

上の

前の句の音たてては架空の音であり後の句の音たてては現実の音である。この二句の対照的なものの見方に教えられるところが大きい。お互いに勉強してゆきたいと思う。

夜が明けりや地球の皮むく

音つづき

諷刺である。宅地造成という名で地球の皮をむいているという見方は面白いと思った。

チャルメラの遠音が秋の夜

をつくる

うまい句である。が一步あやまると無意味な句になるおそれを十分に持っているのではないだろうか。

衣ずれの音とは違うスラックス

これはこしらえた句であると思う。スラックスのする音を作者が聞いたことがあるのだろうか。衣ずれの音というの昔の言葉であつて、句というよりも文字の上

の遊びのような感じがしたのである。この他に雨の音を詠んだ句が七八句あつたがどれも説明の域を出ていなかった。次の二句だけを頂く。

雨だれの音に日曜またもぐ

恋してる雨だれの音詩に聞

え

次回研究題

「真似」 五句以内

発表 十一月二十日

宛先 三十九年一月号の予定

大阪府南河内郡美原町

丹上四〇四 清水白柳

各地特約店に有り

GOLDEN

O.S.K.

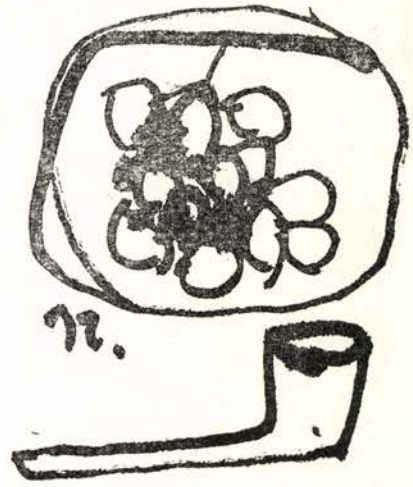
紳士服

スマートで

着心地良い

ス

柳|界|展|望



句 会

▼本社句会は八日(金)午後六時から千日前電停前自安寺で開催。文化の月の一夜を作句三昧で過すべく柳友多数お誘い合せの上出席願いたい。▼南区医師会文化部杏林川柳句会(大阪市)は十月二十三日(水)午後七時から南区三休橋南詰中島小児科診療院楼上で開催。▼七面短詩文学クラブ(和歌山市)川柳部句会は十月十六日(水)午後六時から奥新和歌浦魚叉楼で開催。▼南海電鉄句会(大阪市)は十月十七日(木)午後六時から難波親和クラブで開催。▼コクヨ川柳会(大阪市)句会は十月二十五日(金)午後五時半からコクヨ株式会社会議室で開催。▼大阪通信病院川柳会句会

は十月二十六日(土)午後二時から北館五階会議室で開催。▼堺市文化祭協賛市民川柳の会は十一月二十四日(日)午後一時から堺市大小路、府立堺労働会館で開催。兼題は人口、魅力、すし詰、客足の四題。以上路郎主幹出席。

消 息

▼路郎主幹は十月十日(木)正午から今橋クラブ婦人部の懇談会に招かれ、「川柳と人生問題」について講話された。▼路郎主幹は十月十三日(日)川維京都支部長の田中烏雀氏を訪問、八坂烏居前の旅館「磯田」で歓談された。▼田垣方大氏(倉敷市)から「先日八尾の娘の処へ立寄りましたら婿が毎月の川柳雑誌を本屋の店頭から購入読んでいたとのこと、嬉しくなり早速柳談を一席ぶって来た次第です。私は毎日元気に精励しています。本社の皆様お身体をお大切に」▼黒川紫香氏(豊中市)はさきに京阪神急行を

月十日(日)午前八時半名古屋駅交通公社バス発車場前に集合、香嵐溪山上の香積寺で開催。▼名古屋市中川区川柳作家連盟の秋の吟行会は十月六日(日)岩屋堂温泉権兵衛で開催された。▼正木十千棒居の集い(東京都)は十月十三日(日)に開催された。▼第六回関西短詩文学作品展は九月三十日(月)から十月五日(土)までの六日間、午前十一時から午後七時まで大阪市北区堂島毎日会館毎日ギャラリーで開催。▼美祿川柳会(宇部市)創立五周年記念大会は十月六日(日)午前十時から白岩交友クラブで開催された。定年退職されたが、この程阪急観光開発株式会社(通称新阪急ホテル)に入社調達課長に就任された。▼丸尾潮花氏(高槻市)は日立造船を定年退職の今年一月以来日舞に専念し十月五日家に於て名取りの試験を受け、十一月十七日(日)産経

風流 人間横丁

東野大八著

B 6型 二五八頁

価250円 送費70円

★異常な競争にまき込まれ隻手となって帰還した著者のザックバランな人生批判が、その雄筆からはとばしるさまは凄く、まるで腕の冴えた板場の切れ味にも似ている。★本稿は戦後十三年間、「川柳雑誌」に掲載され、好評、サクサクたりしものに補筆した雄編である。後半に川柳に関する卓見もあり、肩の凝らぬ読物としてお薦めしたい。

橘高薫風子著 麻生路郎序

川柳 句集



価250円 送費60円

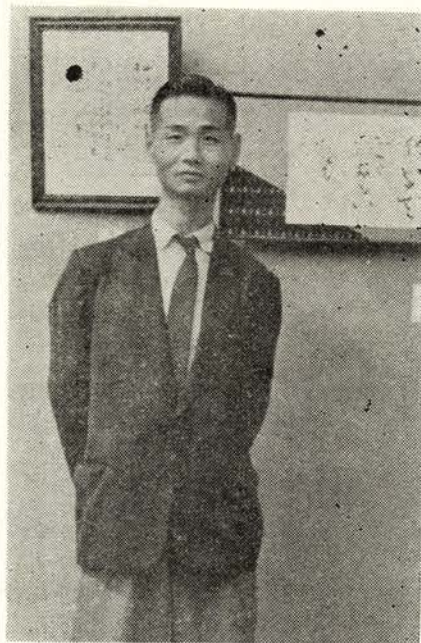
▼著者は新進作家で、繊細な新感覚の持ち主である。川柳不朽洞会に入って採まれ、川柳編集部長として精進を続けていく前途ある好作家である。

発行所

川柳雑誌社

ホールで名取り披露を兼ねた舞踊会があり、名取り名も「若柳潮花」と命名、職業舞踊家として一本立ちされることになった。▼正木客氏(大阪市)の夫人サト子さんは十月一日卵巣腫瘍手術のため栗村病院に入院されたが、手術後の経過も順調で、十月十五日退院された。▼西いわを氏(羽曳野市)は十月四日羽曳野病院五棟十号室に入院された。幸い軽症患者

不朽の人々



山口 浩一氏 (黒産)

川柳を通して、私の人づくりをしている。石橋を叩いて、いかに苦しくとも、最後の一人になるまで、我が道を進む。句会の雰囲気が好きで、本社句会も六年間全出席という事になっている。

魂の合議した日の葦に風

(舟遊)

他人に頼まれると、いやがいえないお人好し。しかし、自分から出しゃばるのもいやである。商売にするとお世辞も大分板に付いて来たが、他人の飯を食わないために気ままが出る。

川柳を通して、私の人づくりをしている。石橋を叩いて、いかに苦しくとも、最後の一人になるまで、我が道を進む。句会の雰囲気が好きで、本社句会も六年間全出席という事になっている。

中旬発行されることになる。▼西谷みさを氏(青森市)から「誌上に小著のご紹介を深謝、路郎先生には尚一層ご自愛の上、柳道のためお返し下さい」。▼奥谷弘朗氏(倉吉市)は十月九日から二十二日まで奈良市五条町の大坂営林局大亀谷研修所に入所、五十の手習いに懸命です。▼杉本一鶴氏(貝塚市)は結核治療の最終的な副作用の強い薬を三者併用しておられるので中枢神経をやられて全身金しばりに会った思いでいられるが、聖書通信講座を十月十日に全課程終了卒業証書の届くのを楽しみに待っております。▼中野懐窓氏(横浜市)高須三味氏(東京都)は九月二十四日開催の青森県川柳社創立十五周年記念川柳大会に出席。二十三日は後藤柳允氏(黒石市)の案内で十和田湖を周遊東北の秋を満喫された。▼若林草右

氏(西宮市)川柳雑誌十月号拝賞、毎号毎号受け取る度に、もっと勉強をしなければと思わされます。▼浜田久米雄氏(岡山市)は十月十三日日本社訪問、路郎主幹と句集「凡人」の打合せをされた。▼越智一水氏(今治市)は十月十四日不朽洞に路郎主幹を訪問、歓談された。十三日に福井県の東尋坊で開催された全国郵政川柳大会に出席の帰途立ち寄られたもの。▼山内静水氏(竹原市)は竹原川柳大会を盛大に開催出来た近県柳人諸家の善意の借りに酬いるため、十月六日は神戸、七日は広島、二十七日は岡山と各地句会に出席された。若い学生の作家を大切に育てることを目標の一つにして今後も頑張りたいとのこと。▼山田季費氏(高槻市)は国鉄幹線敷設の完成までは頭を川柳へ切替える事も出来ぬ程の多忙さで、今も大阪一

米原間を資材輸送立合の暇に走り書きをしているところだ。▼隠岐不醉氏(姫路市)はこの程でたく還暦を迎えられ、益々壮者としての元気を、仕事に精励しておられる。▼川岡霊眼子氏(諫早市)は神示の伝達に深遠で精力的な活躍をしておられるが、来年五月を過ぎると少し暇が見つかることと思うので路郎先生ご夫妻の西九州周遊を予定していたければと存じています。▼富士野駿馬氏(東京都)は九月二十三日、竜宝寺での川柳忌に出席された。近詠に「新日本井伊直弼がわかりかけ」。▼沢田美喜さん(堺市)は米春結婚される予定で、心はずむ秋を過ごしておられる。▼八木摩太郎氏(堺市)は十月八日の町会役員有志で結成の九志会旅行に参加し、琵琶湖畔堅田方面へ清遊、「浮御堂仏淋しいとて立ち」

の句偈を寄せられた。▼田垣方大氏(倉敷市)は十月二十七日浜田久米雄氏の句集「凡人」発行記念句会に出席されたが、岡山の句会へは五年ぶりのこと。柳人諸家と歓談された。▼麻生アト氏(奈良県)はC・M・C第四号に「抽き出す教育(欲のフアクターは興味と関心である)」の小文を掲載された。▼辻白彦子氏(高槻市)は九月一日、竹原市で開催された第六回近県川柳大会に出席、第一位の総理大臣杯を獲得、帰途車中で柳友に取りまかれ総理杯で祝杯をあげられた。▼津秋六花氏(宇部市)は川維宇部支部五平太川柳会が来年五月十周年を迎えるので盛大な大会の企画準備を今から進めておられる。▼米沢曉明氏(大洲市)は二百人以上の修学旅行で二日の旅、高松駅から「引率の腕章教師も同じ色」の句を寄せ

られた。▼西辻竹青氏(奈良県)は山口県秋芳洞を觀賞、川棚温泉で入湯、「温泉がないので大和立ち遅れ」の句を寄せられた。▼野村味平氏(大聖寺市)は絶対性不整脈並心筋障害で入院加療中だが、秋涼とともに治療の効果があり、十一月一ばいで退院の見通しがついて喜んでおられる。▼木山遠二氏(笠岡市)は健康を害され三月十六日広島県福山国立病院三病棟階下十一号室へ入院された。一日も早く快癒をお祈りする。▼土井文蝶氏(大阪市)は胃の手術をするので南区瓦屋町五番丁六の高津病院外科五号室に入院された。▼津秋六花氏(宇部市)が十月十九日朝、大阪から路郎主幹へ電話があり、在阪の令息が交通事故で亡くなったので上阪されたとのこと。詳細不明だが、お悔み申し上げる。

転居

▼菱田満秋氏(東京都)は左記に転居された。東京都江東区深川高橋二丁目五番地(電話〇三〇九七二番)▼高寺和郎氏(堺市大字七番七九三)▼赤地五朗氏(山梨県八代郡下町芝草六三七へ花と改姓された。

改姓

▼丸尾潮花氏(高槻市)は若柳潮花と改姓された。

電話開通

▼川村好郎氏(大阪府泉北郡高石町)の宅に電話が開通した。堺〇六一六二番。

正誤

▼前号三十一頁金泥集下段「玄関のアリラン靴共姦しい」の句主は美代の誤りに付訂正。

明治大正柳誌巡礼

奥津啓一朗

大正七年(一九一八)

一月十五日、黄白、第七号、菊判四十八頁、東京市赤坂区伝馬町一丁目六番地黄白社発行編集発行人五味実江、漢詩、和歌、へなぶり、俳句、川柳、新体詩の綜合誌、非売品。

五味 茶童

元日の朝から人間喰ふ仕度杯をすすぐが後家の氣に入らず川柳欄には「船木夢考、北夢の助、大場北極星、齊藤半七、田口禪狂、松本春花、倉田醉月、寺井小尺一、吉成剣突坊」等の名がみえる。(落合行詩堂氏藏)

大正五年五月創刊(未見)、第十三号(大正八年十月十五日刊)以下不明。

一月、筒井簡一、四六倍判共表紙四頁、外に附録二頁編集発行人胆振国追分河内岐一、個人誌。

発刊の辞で

「川柳専門誌として各地より発行頒布せられつつあるもの決して珍しとせず、然りと雖も、口に初心者の同伴たらん事を唱へて、その実績の挙がらざるは、

そも奈辺に因するものぞこれ徒に虚栄に憧れ、犠牲的精神の幽如せるに依らずんばあらず云々とある。

岐一生(「写生吟」に就いて)みち雄(今人の川柳)外に附録川柳四人男(座談会形式)が載っているだけ。

大正七年六月二十五日第六号改題準備号を出し廃刊。

五月二十日、汽笛、巻の一、四六倍判共表紙四頁、敦賀港川崎三十六番地川柳汽笛会発行、編集発行人船木夢考、中山琴波、船木夢考共同誌、非売品。

船木 夢考

浜仲仕唄の調子で荷を担ぎ新開地ランブが消えて宵の月

中山 琴波

敷島を半飲みにする流行ッ妓女たる貞操を知ってヒステリー発刊の辞に

「薄っぺらな専門誌を出して選者になりたがるのではない。定価の専門誌と交換をしたがるのではない。虚勢を張って自分の佳作を発表したがるのではない。オット言過云々

と。(河野春三氏より頂く)

七月十五日、薄、第七号、四六倍判共表紙六頁、胆振国追分、萍川柳社発行、編集発行人河内岐一

「筒井簡一」の改題誌、一部五銭。

平瀬 萬雄

大掃除して来た事も前座云ひ半巾をベンチへ残す女連

浅井 五葉

膳棚へ亭主が入れて詰り過ぎ仕替の妓行儀作法に難がなし伊東夜叉郎(柳樽妙句和解)篠原春雨(武玉川評釈)課題吟篠原春雨選(頑固)岸本水府選(娘)

浅井五葉選(敵、仇)雑詠等が載っている。柳の盛欄に「近く大阪の番傘が月刊になり云々」とある。

十月二十日発行の第四号(菊判十四頁)以下不明。

飛・燕・往・来

★アイトから霞乃へ

今日のはがきを有難う。忙しくてもお元氣の様子で何よりです。先日NHK第一放送で狸通氏のお話があったので、夜十時からの番組ですが、九時ごろ電話したらお留守のようでした。後から気がついたのですが本社の句会だったのでした。昨年御承知のように家の模様変えをした時、裏の唯さえ狭い前裁ですが、水はけの都合で全部コンクリートに塗り込んでしまいました。どうせ不毛の庭だっ

たけれど一層殺風景になりました。でも、静子が何かと鉢植を造って並べたてています。

ギブスの妻に朝顔の手を指図され

と云う具合です。そう云えばその折は心配をかけましたが、近ごろやっと、杖に頼らず歩けるようになり、不自由ながらボツボツ動いて呉れています。どうかご安心下さい。さてこんな庭でも僕にはわが家の庭園に違いありません。秋ばれの今日このごろは、時々庭に出て、猫たちと遊びます。

底ぬけに晴れたブルースカイ。こんな昼下り、九ちゃんの唄ではないが上を向いていると、僕の庭も、首相官邸の庭も変わりありません。序に現在同居中の猫たちを紹介しましょう。

いちばん古参がチャブ。シセロのようなシマネコです。ちよつといけずなおばあちゃんです。次はベベ。近所の人が飼っていたのですが、少年時代はたえず天ぶらやの屋台の下で地見屋をしていました。何時の間にか遊びにきていてしまいました。現在ではたくましい男性です。地見屋当時得た習性が放らう癖は止みません。次はモコ、彼女はチャブの娘です。他の猫たちはすべて浮ろう児であつたのですがモコだけが家で産れたレッキとしたお嬢さんです。毛並は母親と同じですが顔る氣質よしです。次は又男性、マッ

グ。この名は辞書によると、英雄とか偉大なるものの意だそうです。しかし、名に相違して、迎も内気なゲイボーイです。ベベと同じ焦茶のシマ。押し入って来て居候をきこみました。家の中でも処嫌わず出初め式をやるので閉口しています。最後に僕のマスコット、まだ仔ネコですが全身黒に白いのがチラホラ。これも家の前に捨てられて啼いていたネコです。名前はジミー。最初名づけた素敵な名は忘れましたが、迎も喰い心棒で台所でいつも地見屋をやっています。ジミヤジミヤとニツクネームを呼んでるうちに、何時のまにか地見屋のジミーちゃんになったという訳。

アイト

車
福寿司

心斎橋筋大丸前

電話(271)三三四四番

大萬川柳

「貸衣裳」

入選発表

選者 麻生路郎先生
 投句総数 五百十六句
 入選 四十五句

大阪 つる子

貸衣裳悲喜交々のまにあわし

大阪 幸雄

サービスに喪章もつけて貸してくれ

九龍 柚蘭坊

モーニング借りて行ったにみな背広

大阪 保夫

労組の手続きが要る貸衣裳

大阪 一栄

草履までそろえてくれて貸衣裳

京南 美恵子

貸衣裳明日の花嫁さんが抱き

大阪 文蝶

美容師が下駄履いていた貸衣裳

岡山 宗義

貸衣裳だったとあとで笑いあい

京都 句楽坊

借り着して行かばならん義理があり

大阪 庸佑

貸衣裳大きな顔して写つとり

京北 好郎

貸おしめ経かたびらはまだ貸さず

大阪 生薑

貸衣裳のまま花嫁が失踪し

笠岡 桃里

写真屋に見覚えのある貸衣裳

西宮 牧人

貸衣裳うしろ姿も写しとき

堺 素郎

貸衣裳一割がとこひく日柄

堺 狂二

貸衣裳めでためでたに酷使され

岡山 東岸

着倒れの京にも貸衣裳屋のおわし

笠岡 遠二

貸衣裳脱いでたんでくたびれる

岡山 藤波

結納に心がめた貸衣裳

大阪 晃

貸衣裳こころも借りて来たように

岡山 十九平

貸衣裳脱いで自分をとりもどし

大阪 柳志

母も手を通してみたい貸衣裳

大阪 梅里

貸衣裳穴のあくほどみづらめれ

大阪 梅里

大阪 薫風子

貸衣裳袴をたたむすべ知らず

永遠の愛を誓うた貸衣裳

羽曳野 静波

弟もちょっと着てみる貸衣裳

酒くせを出してはならぬ貸衣裳

和泉 東天紅

移り香も一しよに振袖借りてくる

貸衣裳今日一日の身にあわせ

大阪 小松園

褒められて尻こそばゆい貸衣裳

貸衣裳ならうちかけで嫁くと言う

大阪 阿茶

貸衣裳あとがせくとてとりに来る

花嫁は早く脱ぎたい貸衣裳

見島 恵二朗

貸衣裳屋が見あげている空模様

貸衣裳道真公と同じ紋

岸和田 きさ子

貸衣裳明日の天気にかいておき

助平はきつちり合うた貸衣裳

五客

親類の分まで払うた貸衣裳

式すめばはきとるように貸衣裳

母親もついでに借りる貸衣裳

貸衣裳でもいいのよと娘に言われ

老学者貸衣裳にて参内し

次式の首すげかえただけのこと

(人)

声屋 一十

大 野 迷 路

一 五 晃

二 六 きさ子

三 七 岸和田

四 八 静馬

五 九 宗太郎

六 一〇 石川

七 一一 大 阪

八 一二 大 阪

九 一三 大 阪

一〇 一四 大 阪

(地)

やわ肌にちと触れすぎた貸衣裳

(天)

貸衣裳月賦づくめの部屋に脱ぎ

大萬川柳ベストテン (十月現在)

梅里 二、五 大 阪

薫風子 二、〇 大 阪

方大 一、五、五 倉敷

好郎 一、五、五 泉北

水客 一、三、〇 大 阪

遠二 一、二、〇 笠岡

東岸 一、一、五 岡山

文蝶 一、一、五 大 阪

素郎 一、一、〇 堺

柳志 一、〇、五 大 阪

惠二朗 一、〇、〇 見島

阿茶 九、五 大 阪

圭井堂 九、〇 堺

大阪 野迷路

一四 野迷路

一五 晃

一六 きさ子

一七 静馬

一八 宗太郎

一九 良

二〇 春葉

一四 野迷路

一五 晃

一六 きさ子

一七 静馬

一八 宗太郎

一九 良

二〇 春葉

九、〇 大 阪

八、五 大 阪

八、〇 岸和田

七、五 神戸

七、五 石川

七、〇 大 阪

七、〇 大 阪

七、〇 大 阪

七、〇 大 阪

七、〇 大 阪

七、〇 大 阪

七、〇 大 阪

七、〇 大 阪

七、〇 大 阪

七、〇 大 阪

七、〇 大 阪

七、〇 大 阪

七、〇 大 阪

七、〇 大 阪

七、〇 大 阪

七、〇 大 阪

七、〇 大 阪

七、〇 大 阪

七、〇 大 阪

七、〇 大 阪

七、〇 大 阪

七、〇 大 阪

七、〇 大 阪

七、〇 大 阪

七、〇 大 阪

七、〇 大 阪

七、〇 大 阪

七、〇 大 阪

七、〇 大 阪

七、〇 大 阪

七、〇 大 阪

七、〇 大 阪

七、〇 大 阪

七、〇 大 阪

七、〇 大 阪

七、〇 大 阪

七、〇 大 阪

七、〇 大 阪

七、〇 大 阪

一著名作家の川柳句集一

新刊



浜田久米雄著 麻生路郎序

定価300円

送費50円

大阪市住吉局区内万代西5丁目25

発行所 川柳雑誌社

電話大阪0681振替口座大阪75050

★本句集の著者浜田久米雄氏は岡山の産。多年不朽洞会員として又国鉄川柳人として古豪の名をほしいままにしている。三十余年の柳歴を飾る数千句中より百句を自選し、各句に感想を附して世に問うもの。

★六〇〇部限定版につき、証文はお早く。

★御送金は川柳雑誌社振替口座大阪七五〇五〇番をご利用が便利です。(切手代用可)

いのちある句を創れ



投稿規定
▼用紙は原稿用紙▼文字は正
確▼締切毎月十五日▼投稿先
本社宛

本社 十月句会 (大阪市)

10月7日 午後6時

会場—— 千日前自安寺

新涼の夕、定刻には例によって川柳道
場集まる柳人たちの鉛筆の音ばかり。
本社の至宝清水白柳氏の句評はいつもな
がらの好評である。同氏の今日の引例句
は本誌九月号から、水客、阿茶、竹荘、
草右、東岸、柳志、安平次、きさ子、不
醉、求女、文庫等の人々の句を拾っての
盛たつぶりの句評であった。路郎師の柳
話、句は単なる思いつき句にながれず、
もっと思想的であつて欲しい。従つて雑
吟にウンと力をそいでもらいたいと説
述された。本日の不朽洞杯は、丸紅川柳
会の村田瓢太氏の獲得するところとな
る。時正に午後九時。

出席者——路郎、水客、三發坊、保美、
柳宏子、摩太郎、すすむ、野迷路、判志、
一舟、馬行、舟遊、文秋、佳春、いさむ、
井平、生々庵、八郎、元照、秀子、好郎、
一栄、清子、みさ子、庸佑、進之助、古
方。専翁、圭井堂、泉北、瓢太、文蝶、
黙平、白溪子、たつみ、柳志、野菜、静
馬、与呂志、紫香、天樹、梅里、メ女、
珠笑、白柳、阿茶、宏子、

兼題「簪」 麻生路郎選

高志 長やみのいたいたしくも簪を持ち
壽美司 据膳で簪まで割つてくれる母
梅里 塗り簪でかけ落ち飯の世帯持つ
舟遊 嫌いかと云えばありて簪を持ち
白柳 簪持ったままで受話器へ走らされ
珠笑 日本酒へ一簪毎に簪を置き
一栄 簪宙に浮かせて話ばかりどろろ
保美 アメリカで感心された簪さばき
どんたく 上座まだ唄うつもりか簪をとる
好郎 簪まくら簪が置かれたまま更ける
水客 簪置くが早い子供も居らず
文秋 割箸にぎつちよもまじる子沢山
摩手郎 塗り簪に小芋を落して見くびられ
与呂志 折詰めてくれる仲居の簪さばき
黙平 箸紙にそつと書かせた妓の名前
主井堂 苦勞性余分に簪を入れてやり
与呂志 手ぎわよくお背を拾つてくれる簪
好郎 ながい伴侶だ簪も一緒に入れてやれ
野迷路 スキヤキの簪へ英語のまじる人
水客 戴いて簪とる人と向い合い
黙平 会席の割に粗末な仕入簪
主井堂 一等車同んなじ簪の昼を買い
白溪子 今日からは割簪でない旅終る
生々庵 宴果てて身内ばかりの簪になり
たつみ 腹立つ日割簪さえも折れるなり
瓢太 兼題「巨木」 川村好郎選

雷鳴に巨木はいどむ姿なり 静馬

阿茶 巨木にも限界があり空洞が出来
黙平 由緒ある巨木へ理解ある役所
老社長巨木倒れる様に逝き
柳志 伝説もなく大木切られけり
静馬 已さんが居やほる大樟拜まされ
黙平 巨木取り入れた老舗の店構え
野迷路 黒ざかい巨木があつてすぐきり
専翁 風雪に堪えし巨木の青若葉
主井堂 惑星とも云われ巨木とも云われ
進之助 寄らば大木履歴書へ添手紙
滋雀 汚職パレホシは巨木の裏へ逃げ
同 求職は大樹にばかり寄りたがり
静馬 もろもろのデイトに大樟蔭を貸し
泉北 飛び込んでみたが巨木の冷めたすき
水客 立ち寄れば大木のかげと儲けてい
好郎 賛成の肚は大樹の蔭がよし
黒川紫香選 兼題「毛筆」

目録を書く日の筆の撰り好み 黙平

たつみ 就職の毛筆辞表にもつかい
珠笑 毛筆を持たば祖母の字が生きる
たつみ もう一度たしかめて置く筆を持ち
静馬 毛筆で書いて年賀状らしくなり
柳宏子 朱を入れる筆はきれいな狐を描き
一舟 毛筆の便りへ返事書きそびれ
柳宏子 達筆がちびつた筆で書き流し
水客 年寄のかたくな筆を洗つて待つ
野菜 香典袋ちびた毛筆借りて書き
庸佑 履歴書はいやいやながら筆をもち
柳志 御祝儀を包んで筆が見当らず
紫香 毛筆のうまい男へ筆を出し
戸田古方選 兼題「夕映え」

夕映えに保険切れたを思い出し 滋
 夕映えにそろそろ二人の中之島 いさむ
 名月というのに夕映え消え残る 生々庵
 夕映えにふと極楽のこと思ひ 佳春
 夕映えにてれて咲いてる月見草 清子
 夕映えを背にして海女の夕仕度 たつみ
 夕映えの空をブラッッけり上げる 宗義
 明日のいのち約束をして夕映え 生々庵
 夕映えにトンボくも何処に寝る 与呂志
 夕映えのなかの一つになっている 水客
 何もせずにただ夕映えの美しく 古方
 席題「子供連れ」 松江梅里選
 危いと子供を連れて行くデイト 苦菜
 子供連れ呑まぬ約束して出かけ 泉北
 子供連れもうこりこりを繰返し 馬幸
 子供連れ来てくもコンパッ忙し 生々庵
 子供連れでつかと二階断られ 柳志
 子供連れパパが何度米た名所 好郎
 定年の気楽さ子供連れて出る たつみ
 子供連れベンチの位置を云う待ち 白溪子
 子供連れデパート金のかかるこ 瓢太
 ハミリがうまく撮れない子供連れ いさむ
 子供連れ共同募金に狙われる 珠笑
 風船だけ貰うてごまかす子供連れ 静馬
 お隣も子供連れだと連れて出る 馬幸
 子供と来てゆっくり二人分の席 生々庵
 じゅうたんへ気を使ってる子供連れ 白柳
 子供皆連れて村中ふり向かせ 天樹
 こぶ付きでんねんと迷惑そうだし 文秋
 子供連れとわかれおんなん引留めず 静馬
 きつちりとカメラをかけた子供連れ 紫香
 心臓強う割込んでくる子供連れ 清子
 子供連れバスに乗ったらおしこや 文蝶
 青い目の子供も連れた遊園地 みさ子
 親同志話しはずむ子供連れ 清子
 子供連れきつちり時間に戻って来 いさむ

お父さん子でして通夜の席にいる 水客
 子供連れおんなんデキを食いたがり 舟遊
 子供連れ同志に通う水を分け 一舟
 子供連れ質より量をまだ探し 好郎
 再会が過去に触れまい子供連れ 天樹
 手を引いて一人は負うた市場籠 井平
 両親の手にぶらさがる水溜り 梅里
 席題「根性」 金井文秋選
 色男根性だけでは息が切れ 生々庵
 根性悪の親を泣かした子の家出 同
 根性悪した管ライバルとは知る 圭井堂
 法律がその根性をねじ伏せる 文蝶
 根性に惚れたわ本人よりも始 圭井堂
 根性を見られそうでよう酔はず 柳志
 根性もはめて質屋は貸してくれ 同
 職人の根性時の流がとり残し 文蝶
 ぜにのこと言うて根性見すかされ 梅里
 背水の陣へ根性プラスされ 一舟
 小男を云わず根性を買うてくれ 同
 根性は船場仕込みの帆前掛 進之助
 のれんつぐ根性もくブラブラし 瓢太
 職の鬼その根性が気に入られ 天樹
 妙に意地張って根性見透かされ 同
 屋台店出して根性だけ捨てず 紫香
 先代に負けぬ根性を芸に見せ 白溪子
 貧乏はすれど根性は曲がつて 井平
 根性に生きる女の不幸せ 保美
 根性悪の幼稚園から教えられ 静馬
 根性わるしとて大きい声で泣き 与呂志
 うぶ声がもういやいやの首を 進之助
 根性をすえているのが胸をはり 柳宏子
 ドタン場で妻の根性にささえられ メ女
 根性を出し場を男考へる 文蝶
 根性を露骨にみせて座をはずし 白溪子
 左り前根性までもちとまがり 摩天郎

根性を発揮しすぎて左遷され 清子
 根性のないチンピラで束になり 文秋
 席題「平凡」 本多柳志選
 倦怠期平凡すぎて気がつかず 白溪子
 平凡な方が先輩ぬいて行き むらく
 平凡な家庭の妻となつて悔い 梅里
 還暦が来て平凡のよさを知り 一舟
 見る人が見れば平凡とは見え 庸佑
 平凡に暮らせと祝辞続くなり 圭井堂
 平凡に暮しへ猫も欠伸する 清子
 平凡な暮らしへ猫も欠伸する 清子
 平凡が平凡無事に来てもしま すすむ
 ネクタイを締めて昨日と同じ道 珠笑
 男好きとは平凡な美しさ 文秋
 平凡な顔で刑務所から帰り 与呂志
 御神体は只平凡な石であり 瓢太
 平凡が欽めば変った人になり 井平
 平凡な暮らしを破るすき間風 清子
 平凡な顔へ漫画のペンを投げ 柳志

川維 阿倍野支部句会 (大阪市)

金井文秋報

食品と原資材機械包装の総合誌

食品と科学

Food Science

本社 大阪市北区源蔵町 5 (361)9373代
 支局 東京都千代田区神田錦糸町 2 (291)9629代
 名古屋市昭和区村田町 2 (88) 9069

根性のあるのはさつきと止めてゆき 柳宏子
 全財産手に握ってる特売場 生薑
 余生まだ心に思う人がある 弥生
 一寸したヒントへ株が動き出し 市郎
 ヒントあたる方がいらしてしま あいき
 二代目はヒント探しに外遊し 一舟
 特売と云わず値ぶみをさそ 東天紅
 井池で生きた根性学んで 洋敏
 値切るだけ値切り手形を出す根性 白柳
 すし詰めで五十三次立ちどろ 八郎
 いやな事忘れた事にする余生 野菜
 デザインブッシュに買気買うて来る 紫水
 根性で五人育てた未亡人 悦子
 ハイウエーだけが良った雨の旅 宗義
 すし詰めへ晴衣も思い切つて乗 万里
 すし詰めの都会の隅で強く生き 万里

川維 玉造支部句会 (大阪市)

西出一米報

あばら屋に住んで虫の音みな覚え 一舟
 老人の日に老人の自慢聞き 柳宏子
 老人の敬遠されて眠りなり 六童子

かけ金が済めば定期に置けると云い
 当てはずれ許りしている株す測
 子にかけた期待が外れ養老院
 お土産を待つていたのに酔うたはる
 当外れだったが母子無事な産
 安いとこ聞いてきたのに休んでる
 墓石を撫で撫で母の愚痴つづく
 叱ること撫でることとのむつかし
 山肌を撫で秋風のわたり来る
 無事産んだ髪のを撫でてより
 その皮肉逆撫でされているような
 撫でるだけ撫でて母言いきかせ
 中絶の罪の意識のないままに
 罪意識もたずお金で済ませる気
 井平 正彦 喜久堂 八郎 天樹 文秋 清子 国雄 秀子 珠笑 一栄 水京 生薑

川雑 京都支部句会 (京都市)

田中 鳥雀報

先約が有るとは嫌な女たち
 先約は誰とライバル気にしてる
 先約が有って裏階段からおる
 土管の中から大人の秘密が見える
 土管の向うの子を呼んでいる
 子供等の遊ぶ土管は立って居る
 味噌汁の底に蜆の砂光る
 疑いもなく飯びつの底の音
 胃の底に女がもたれている
 キャベツぎく不平の底を占む
 セックスに触れて毒舌やや鈍り
 放尿長し毒舌のまだつづく
 秋の蛾は孤独金粉まき散らす
 古る仏おへそに金粉が残ってる
 白史 生薑 白扇 喜由 司郎 紅鳥 紫蘭 豊次 枯粒 和三郎 幸男 ゆきら

川雑 ハワイ支部句会 (ハワイ)

築山快夢起報

ブレイキのきかぬ車で坂を越し
 冒険だった昔を今は夢になり
 冒険に似た恋もした若かった
 冒険を知りつついだ肩替り
 冒険な曲芸此方が固くなり
 月旅行一番乗りは誰がする
 冒険と知りつつ引けぬ義理あり
 馬鹿な事冒険でしたと声落し
 冒険なプロポーズ見事はねられる
 冒険もあつて猛獣狩がすぎ
 冒険も一家を背負う生きる道
 冒険は語る年とはなつちまい
 冒険の意慾野心が捨てきれず
 冒険は予防線張る峠になり
 冒険にあらず富士子に恋をする
 冒険で太り忘れぬ株の味
 証券へ女房の方が凝り始め
 あき坊 万里歩 峯圓 同 カロ女 浅太 暁舟 同 快夢起 紅溪 笑有 静杉 柳葉 魔花麗 平八郎 斧平

川雑 岡山支部句会 (岡山市)

浜田久米雄報

名刀は先祖の流れを秘めて冴え
 ご先祖に済まぬ気持で売つちい
 故郷の先祖は寺に任せ切り
 釣書に士族の誇り書いてあり
 遺産など気にした盆の墓参り
 成金に先祖の墓が小さすぎ
 栄枯盛衰先祖へ断念して貰い
 一城の主が祖先にある系図
 浄美 宗義 照路 美舟 拍郎 秋月 幽谷

川雑 出雲支部句会 (出雲市)

尼 緑之助報

御先祖を語る系図を虫が食い
 御先祖も無学か系図見当らず
 折伏はされぬと仏間の灯がゆれる
 登記所で先祖へすまぬ判を押し
 親切を見しらぬ人にうたがわれ
 ご先祖に詫びてご意見けりかつき
 胡風 佐加恵 秋月 始ん坊 幸仙 三平

川雑 備前支部句会 (岡山県)

横山一声報

溺死したこの涙をふく秋の風
 老嬢の心ゆさぶる秋の風
 秋風に押されて安定所へ急ぎ
 骨皮になって秋かせ迎えたり
 秋風へ妻が気をもむ質の札
 秋風がバカスほけに活を入れ
 秋風の立つ頃珍味がとどく筈
 秋風の中に墓石光り居り
 秋風は淋しいものと決めて居り
 秋風に吹かれアベック動かない
 夏やせがなほらぬままの秋の風
 秋風に押倒されし夏の花
 秋月 良江 胡風 照路 伊久野 干秋 美枝子 東岸 浄美 宗義 正淵 のぶ子

川雑 宇部支部句会 (宇部市)

津秋六花報

夏物を赤札にする秋の風
 すだれから障子にかえた秋の風
 表情は別の私のまま撮られ
 新婚に予言嬉しい事ばかり
 親切を受けて流してマダム生き
 古語辞典俗語辞典も要る川柳
 大学の子にやる手紙は辞書を引く
 辞書にない事は長老生字引
 新語辞書花の命に似てさみし
 辞書持っているのに親にさく子供
 重宝な人にされている生字引
 生字引と云われ停年惜しまれる
 辞書買うとせびつた金でするダイ
 栄転もなくして職場の生字引
 字引にはこうだと理詰で子がからみ
 辞書出せと親子がもめる新漢字
 垢じみた辞書に我が身の培われ
 参考書だ辞書だと唇をかじるる
 辞書繰って繰って子の名に迷い
 高い事承知で月賦払って居
 チト声が高い隣りに人がいる
 ない髪を右へ左へくして分け
 パーマ髪茶色に染めて帰って来
 わが髪に白さが増して秋を知る
 髪だけは白慢にしている親ゆすり
 弥寿子 久米雄 あい 芳月 生薑 頼子 羊歳 実男 盤茶 南風 東村 とし子 成理智 六花 山峰 万年青 六花 弘道 勇 富雄 信夫 明暗 正二 清盛子

川雑 木次支部句会 (島根県)

藤井明朗報

髪型の型変えてもかわらぬ面相 祥月
高い事言うなと友の金を借り 昌
洗い髪詫びて出て来る台所 明朗

川 土佐支部句会 (高知市)

川竹松風報

忠告をさほど思わぬ事故にあい 天
経験があると忠告聞かされる 三郎
人形を作る器用で病んでる娘 勝子
偏屈で器用な腕も持ち臭れ 古城
生活に負けた男にない器用 斐山
別室へ来て本心を打ちあける 勝喜
本心は知らぬ片恋の文を抱き 寛
許す気で居るのに父はまだ叱り 松風
二号さん金魚も小鳥もつがいにし 和泉
本心を例え話で持ちかける 蟠蛇
混浴へ年増平気な顔で来る 未遂
岩清水子は水筒のお茶を捨て 可香
風船に託して夢の花送り 喜代女
風船も離せば自由な空へ飛び 幸葉

大阪通信病院川柳会 (大阪市)

森下愛論報

バカンスへ買出し経験役にたち 和子
バカンスがとりもつ縁で高砂や 治夫
バカンスの計画だけで見をじらし まさる
バカンスの疲れかB G 口重く 露児
バカンスといふもコマシヤルだけのこと ハナ子
独身の女医田舎ではもてあまし 竹青
丁寧に丁寧に女医手を洗い 春葉
女医さんも家に帰れば人の妻 一郎
頼られてく女医とうが立ち 敏行

美しい女医だと聞いて診て貰い 愛論
回診の女医ははのかな香を残し かをり
君々と女医インターンへ手招きす 風仙洞
小包に四ツ角書いて届けられ 幸男
目じりにも来れば四ツ角ビルの建ち 春雄

帝化川柳会 (大阪市)

谷沢好祐報

有休をゼロにして梅雨が明け 九紫
庭木とは悲し主人の好むまま 辰始
庭だけが値打ちと旧家買い取られ 一徹
名月は一坪の庭に顔を出し 一男
ハイヒールまだ背伸びして歩きたし 雄水
横車押されて低姿勢くずれ 一平
水に泣く低い土地でも父祖の土地 好祐
走るほどでもない梅雨にぬらすシャツ 京一樓
箱根路の梅雨へマイクは歌ばかり 雅堂

コクヨ川柳会 (大阪市)

川口理休報

美容院でふるさとのよきみしめる はたる
取巻きが声なき声を抹殺し 広彦
取巻きにママはどのおあいそう 昭一
我がことのように取巻巻を云い 理休
とりまきが昇進おやじは左遷され 武
賢妻は取巻きだけの咎にする 瑤己

南海電鉄川柳会 (大阪市)

辻圭水報

ナイターの灯を窓に見る超運動 句念坊
せめてこの球場の土一握り 八郎
球場の風さえ神経とがらせる 圭水

球場のどよめき南海が入れたらし 宏子
球場にナイター果ててすだく虫 専翁
ナイターというこに会いましやう 路郎

どんぐり川柳会 (羽曳野市)

古川静波報

扇風機むけて税吏にかしこまり 痴亭
うなぎ屋の客寄せと言う扇風機 五郎
扇風機止めて密談深うなり のん子
晩酌の父にとられた扇風機 功雄
新型の首振る風に世辞も出る 六又
扇風機の廻っている方が上座なり しげる
セットした髪に無情な扇風機 夏子
先ず先に着て行くものがと女 小樓
流行とあらばおへそまでも見せ 浪路
銭湯で術後の裸小そう居る 静波
口ひげの手入れ怠る日の微熱 凡子
男子寮出前の皿へ蹴つまずき ふじ子
よりかかる男の胸の厚きこと アキコ
底辺に生きる男のコップ酒 ひとみ
嘘ついた瞳に夕虹がきれいすぎ 紀太呂

あすなる川柳会 (大阪市)

山本寿郎報

いつからかときめ胸を持ちつづけ 梅里
望遠レンズで水着を追いかける ゆきを
根気よう進うたところで待ちつづけ 福郎
二の腕の汗のとなりへ詰め込まれ 恵美子
カミソリをうけて俗界を断つ尼僧 酔泉
ナイロンの水着に困る目のやり場 幸児
髪を剃るように持たず股切り魔 尤三
自惚れを水着にさらすコンテスト 百酒

富柳会句会 (富田林市)

阿部柳太報

へそくりの上手なだけが妻の才 半月
へそくりは健康保険の還付金 凡太
へそくりが電化に生きる団地族 紅月
へそくりを嫁いだ娘にせびられる 静林庵
日曜日針箱あけてどなられる 笑照
へそくりもこんなたまつてこわくなり 幸吾
辞典から夫のへそくりみつつけ出し すみれ
本妻に負けず二号もへそくるる気 きはち
子ねずみがババのへそくり見つけて来 まさる
うら盆のお経エンジンかけたまま 美代
御先祖がどうの斯うのと盆の客 六竜子
坊主持ちお盆にすれば面白し 摩太郎
苦勞して世話したお礼西瓜一つ 菊代
たたかれて西瓜売られてゆく運命 花梢
行先で西瓜出される腹具合 吉太郎
ばあさんの眼鏡つづくりする眼鏡 栄一郎
玉のない眼鏡を拭いて漫才師 柳太

宴会・出張パーティ・折詰弁当

大萬

梅里ノ店
料亭
阿倍野区松崎町三ノ一〇
TEL(三三)三九三五番
アベノ橋近地下食通街
TEL(三三)〇一四七番
南区豊屋町三ツ寺センター
TEL(三三)九一八四番
串の店

柳 樽 室



路 郎 生

★秋は日に日に深みゆく。作句精進には、もって来いのシーズン。
★前号は好評だった。十月はとて柳務多忙で、編集局は朝の五時から夜の十二時までフルに働いた。コレで発行が遅れるようでは割に合わない。今回は内輪話で責めをふさぐこととしよう。
★関西短詩文学作品展は盛会だった。薫風子が記事を書いて呉れたので、その方で盛況振りを知っていただきたい。相変らず阿茶の人氣は大したもので赤紙モリモリだ。その後、阿茶から霞乃に電話がかかって、「前回に色紙を買って呉れたファン連中が前回よりウンと巧くなられたと讃めてくれたのはいいのですがコレでは前回の分は割引して貰わにゃないまんね。ワヤです

★久米雄の「凡人」が、予定から一寸遅れたが下旬に出て、十月二十七日の出版記念祝賀会には数日の余裕があった。ヤレヤレであった。
★路郎の衣鉢を継ぐと皆を笑わせていた文蝶が過日入院して胃の手術をした。私が見舞った時はリンゲルの注射をしたり、輸血を注射していたので、お互いに眼で口をきいて、数分間で病室を出た。奥さんの話では胃の三分の二を切除したそうだった。一日も早く癒してもらいたい。私が文蝶のイハツを継がねばならぬようになっては困る。
★宇部の六花が、突然大阪駅から朝早く電話を呉れた。この春に大阪へ就職していたことが交通事故で亡くな

ったという電報を昨夜うけ取ったので上阪したのだとのこと。二十四才の青年をフイに奪われた六花の悲しみを思うと悔みの言葉も、なぐさめの言葉も出なかった。
★花柳芳吾さんが、祖母の五十回忌と母堂の十三回忌の追善舞踊公演を道頓堀朝日座(元文楽座)で催された。芳吾さんは芸一筋の人で、稀れに見る孝養心の深い人格者、この弟子になって十数年技を磨いている我が社の副主幹中島

柳人交歓年賀広告を募る

川柳雑誌社

新年号へ
あなたの年賀広告を
★一口金三百円。
幾口でも申し込んでください。
★一口分の原稿は住所と姓と雅号程度。活字指定はおまかせ願います。
★一口分は五分の一段組三行。
★原稿締切は十二月七日着便。
★広告料は前金のごと(郵券代用でもよろしい)
川柳雑誌社
いう熱心振りだったし、舞台度胸の方は副主幹と医師会長で永年

社の黒板

鍛えられているので、小石奥さんをはじめファン連中の誰れもが心配しなかったようだ。私はその時間に、すみれ文化会で川柳講演をやっていたので折角の妙技を観せてもらう機会を逸した。私が駆けつけたのは第一部の終り頃だった。
★もっと書きたいことがあるが紙数が尽きた。
高松。☆玉造句会11日(月)六時半。題、サービス・国民・連絡。所、市電玉造南百米大阪信用金庫。
☆明和研究句会 10日(日)一時。題、燈台・七五三・夜勤。所、阪神電車鳴尾駅下車東南二百米鳴尾公民館。
☆京都句会 16日(土)夕。題、白湯・魅力・拇印。所、未定。
☆かがみ句会 2日(日)夜。題、署名・焚火・残り物・冬仕度・解散。所、池田古
☆阿倍野句会 20日(水)七時。題、骨おしみ・名門・つば・大目。所、松崎町三の一〇割烹大万。
☆南海電鉄句会 21日(木)六時。題、タクシ・あくび・中学生。所、難波高架下親和クラブ。
☆堺句会(文化祭) 24日(日)一時。題、人口・魅力・すし話・客足。所、府立堺労働会館。

川柳雑誌社主催
本社十一月句会

12月本社句会
「空果」
「チップ」
「質素」
「ニュース」
兼題
「無責任」三句 中島生々庵選
「すねる」三句 西尾榮選
「古都」三句 小川恒明選
「長尻」三句 本多柳志選
三題 当日発表
席話 豚生路郎
呈賞 各題天位・各題天位を路郎選により 天位に不朽洞賞
会費 百円
★投句だけの方は郵券三十円封入(切は十一月五日) 本社宛
川柳雑誌社句会部
電・大阪朝六〇八一



第一製薬
東京・日本橋

精がつく薬 パント錠

副腎・肝臓強化

副腎に効くパント錠は
精がつきます。疲れがとれます。
疲労・中年過ぎの精力、体力の衰え
二日酔・肌あれ・アレルギー性疾患

20錠・50錠・100錠

麻生路郎著

好評噴々

新川柳鑑賞

川柳の味い方・五百数十句

(毎日新聞評)

麻生路郎さんは明治三十七年から川柳を手がけているというから川柳歴はもう六十年にもなる。
この新著は麻生さんが毎月出している「川柳雑誌」に掲載されたものを中心にその他の雑誌や句集からひろった五百六十三句について、ひとつひとつ丁寧な注釈を加えて、鑑賞の手引に資そうとしたものである。
句の方より実はその鑑賞文の方がなかなかうがっている、一気に読ませる魅力がある。

大蔵市住吉局区内方西五丁目二五番地

発行所 川柳雑誌社

電話大阪(671)六〇八一
新橋口屋 大阪 七五〇五〇

価二五〇円

送料八〇円

B6版

二五〇余頁

麻生路郎先生著

川柳とは何か

—川柳の作り方と味い方—

川柳はわれわれ庶民の偽らざる声である。絶叫・嘆息・嘆声・嗚咽——そうしたまろもろが十七音に圧搾された風刺と諧謔の短詩型、それは伝統的であると共に常に革新的である。その川柳がいかんして発生し、経過し、今日に至り、将来に動くか、しかもその作り方は、味わい方は——以上を最も明快にわかりやすく、斯界の第一人者たる著者が答えているのが本書である。

価二五〇円
送料七〇円

取次所

川柳雑誌社

至文堂

東京都新宿区弘方町27 振替東京29507

Printed in Japan

募集

課題吟募集

幕あ (十句以内)

温胸室 (十句以内)

宿手 (十句以内)

瓜独 (十句以内)

ライバル (十句以内)

近作柳梅 (十句以内)

川柳塔 (十句以内)

文章 (評論・研究・感想其他)

投稿規定

投句は各種必ず別紙に認め、住所氏名雅号を明記する事

「近作柳梅」は一般作家の雑吟を募る

「課題吟」は誰でも投句が出来る

「川柳塔」の投句は不朽洞会員に限る

毎号募集

麻生路郎選

北川春樹選

麻生路郎選

藤甲吉選

西森花村選

川村好郎選

早川清生選

那谷光郎選

正本水客選

正木客選

幕あ (十句以内)

温胸室 (十句以内)

宿手 (十句以内)

瓜独 (十句以内)

ライバル (十句以内)

近作柳梅 (十句以内)

川柳塔 (十句以内)

文章 (評論・研究・感想其他)

投稿規定

投句は各種必ず別紙に認め、住所氏名雅号を明記する事

「近作柳梅」は一般作家の雑吟を募る

「課題吟」は誰でも投句が出来る

「川柳塔」の投句は不朽洞会員に限る

B列5号 毎月一回一日発行

川柳雑誌 第三十八号

定価 一二〇円 (送料六円)

半力年 七五六円 (年刊)

(禁転載) 一力年 一四四〇円 (年刊)

昭和三十八年十月廿五日 印刷

昭和三十八年十一月一日 発行

大蔵市住吉局区内方西五丁目二五番地

編集兼発行人 麻生路郎

行印刷人 麻生幸二郎

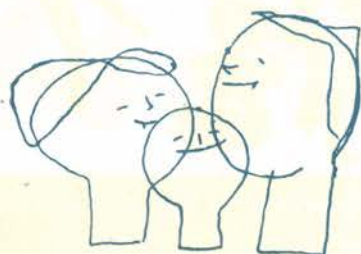
大蔵市住吉局区内方西五丁目二五番地

発行所 川柳雑誌社

電話大阪(671)六〇八一

新橋口屋大阪七五〇五〇番

一家そろつてホーライ党



廣東料理



大阪なんば・TEL (641) 551-2

疲れをとり
抵抗力の強い
からだをつくる

高単位総合ビタミン・ミネラル剤

ポポン-S

20日分 350円・60日分 950円・120日分 1600円



塩野義製薬株式会社

「中外製薬」
技術陣の新開発!

新型 健康増進剤!



(包装・価格)

六〇錠 四〇〇円
一〇〇錠 七〇〇円

エネルギーを産出するTCAサイクル。蛋白の産生を円滑にする尿素サイクル。この二つの作用を賦活し、栄養を高める新型健康増進剤です。
☆栄養がすぐれない☆疲れ易い☆病中・病後で体力が弱っている☆肝臓や、胃腸の働きが不良などの際に用いれば好適です。



中外製薬

南海・南紀直通ライン

▽新宮ゆき なんば発時刻
デューゼル準急南紀1号：毎日…8時10分発
デューゼル準急南紀2号：毎日…16時40分発
夜行直通列車：毎日…22時07分発
▽白浜口ゆき なんば発時刻
デューゼル準急
第2きのくに号：毎日…12時43分発
週末準急くろしお号：土曜ごと…13時10分発
▼ご乗車の7日前からなんば駅で発売していただきます
お問い合わせ
南海交通社
(64)8686

南海電車

昭和廿二年七月一日 第三種郵便物認可
昭和廿八年十一月一日発行(毎月一回一日発行)
編集 兼 発行印刷人 藤生幸二郎 発行所 川柳雑誌社
大阪市住吉区西五丁目二番地 電話大阪(6)716081
振替口座大阪七五〇五〇番 定価百二十円(送料六円)

99260
775
58485